

た な か み つ ぶ
田中 充さん

浜松市東区笠井地区自治会連合会長

浜松市東区笠井上町自治会長

●やらまいか気質で前進を！

浜松市は、産業においては光産業、四輪・二輪産業、楽器、繊維等が世界的である。伝統的な芸術文化としては、浜松まつりや世界ピアノコンクールのほか、地区ごとにも多数のまつりが存在する。自然環境としては非常に豊かで、日照時間も日本一である。

このような強みを活かす工夫が行政と市民が協力し合い前進することが必要だと考えている。

●やめまいか気質が散見？

浜松市は、市内に中山間地域と都市部を包含しており、多様な価値観を持つ市民が生活している。このような状況下で、例えば都市部に適した政策を実施しても、中山間地域でも受け入れられるとは限らない。市民を巻き込んで、じっくりと市政を執行していくべきだろう。

また、最近気になっているのは、特に若い年代において「やめまいか」気質が散見されることである。浜松は、徳川家康公が青年時代の17年間在城し、三方ヶ原の戦いの敗戦など苦渋の日々を経験するが、それをバネに天下統一の礎を築いたまち。今の浜松でも、どんな苦渋下においても諦めずに希望を持ってほしい。

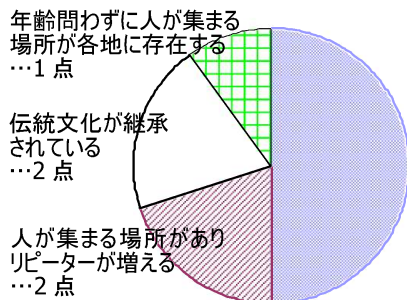
●将来に向けて大胆な施策を

今後、人口は減少し高齢化も進むが、浜松市には東名・新東名高速道路、国道1号があり、交通の大動脈は整備されている。有効に利活用することで定住人口を増加させることも、商圏を確保することも可能だろう。また、高齢者には必ずしも高額な医療費がかかるという悲観的な展望ばかりではない。元気に活躍している高齢者はたくさんいる。健康に長生きしてもらおう。市役所をまちなかの公共交通に連結できる場所に移転させて浜松城周辺に憩いの広場を用意するなど、大胆に整備をしてしまう考え方も重要だ。



【田中充さん】
市民と行政は投手と捕手の関係。市民からは適切な要求をし、行政はそれに応えて欲しいと語る。

市民と市の関係が強化。 市民生活が安定するまちに ・・・5点



【浜松市への期待度グラフ】

●矛盾への挑戦

行政組織に求められるものは、経済・福祉・教育を充実させること。浜松市としてしっかりとこの3点の充実を努めてほしい。区役所が設置され、市民と行政の距離感は縮まったので、ただ市に期待するだけでなく、自分たちは何ができるか、何をしてほしいのかというアイデアを市民は出していかなければならない。

やるべきことは多数ある。すべてを解決することはできないので、しっかりと市民と行政の意思疎通を図りながらお互いに協調して歩んでいくことが重要になる。30年後なんて、あっという間である。

た の せい い ち
田野 聖一さん

静岡国際言語学院勤務

●お互いを知ることが大事

外国人と日本人、お互いを知らないで誤解や恐怖を生む。コミュニティ規模の小さい外国人側から歩み寄るのは難しいので、どうしても同じ国籍同士で集まってしまう。規模の大きい日本人側から手を差し伸べることが大切である。また、日本人の中でも文化の違いはある。外国人は日本の文化を否定しているのではなく、住み良い暮らしを求めている。文化の違いはお互いを知る機会を増やすことで、許容できると思う。



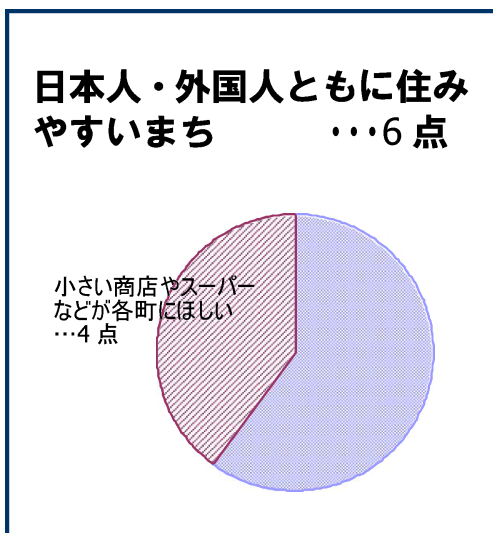
【田野聖一さん】
外国人と日本人がお互いをもっと知ることが大事。

●日本語教育の活動を継続的に

外国人にとって日本語教育は極めて大事である。また、活動は継続していかないとなかなか成果が出てこない。自分自身、「にほんご NPO」で日本語教師をしていた。主な活動目的は、外国人と日本人のコミュニケーションを図ること、外国人の日本語能力アップ、日本人向けに外国人に伝わる簡単な日本語を話せる能力アップ。日本語を理解することができれば、お互い意思疎通ができ、コミュニケーションが図れる。しかし、浜松市の補助金が活動費の2分の1であり、活動を継続することが難しいと感じている。補助金を充実させてほしいのはもちろんだが、大学との連携モデルを構築し一緒に活動できたら良いと考える。

●多くの外国人の強みを活かして

横浜市は中華街で成功している。浜松市にブラジル街をつくったり、ブラジル料理を提供するイベントを開いたりしても面白い。まちなかで開かれているサンバのイベントは効果を挙げている。浜松市は他の都市にはない、多くの外国人が住んでいるので、強みを活かさないともったいない。



【浜松市への期待度グラフ】

●移民問題をもっと真剣に

私自身、外国人は、どんどん日本へ移住してもらった方が良いと考える。少子高齢化対策として子どもを増やすよりも現実的ではないか。また、30年後には外国人の不就学児童が大人になり、仕事に就いていない外国人が増えることも考えられる。移民政策、言語政策についてもっと真剣に考えていくべき。浜松市はすでに多くの外国人を受け入れているので、こうした強みを活かして外国人と共存することに責任を持って取り組んでほしい。

たばた たかひさ
田畑 隆久さん

田畑公認会計士事務所

●失敗を恐れず自由に挑戦する気風を！

浜松の強みは、進取の気質に富むところである。しかし現在、行政も民間もリスクを冒すことを極度に恐れ、それが地域の閉塞感を生んでいる。これだけ変化の激しい時代にあって 30 年後の社会経済を予測するのは困難であり、都市間競争に勝ち抜くためには、行政が税収確保を政策の中心に置きつつ、失敗を恐れずに、積極的に取り組むことが大切である。また、高齢者も今までのように、社会に依存するのではなく、むしろ社会の主たる担い手となるような、政策を展開すべきである。

人口は都市の実力の源泉であることから、例えば、長く市内に住むことを条件に、もっと子育て支援を充実すべきである。また、民間企業にあつては、様々な起業が活発化するよう、積極的に資金供給がされる仕組みが大切である。

●本質を捉えたメリハリある行政を！

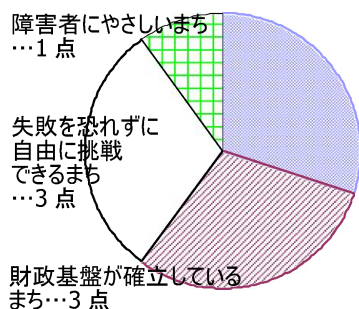
外部監査をはじめ様々な政策に携わる上で、形式論で政策が進められていることが非常に気になる。例えば、観光行政は様々なキャッチフレーズを付けて政策を展開しているが、他地域と比べた実力差や独自の魅力など、客観的分析に基づく冷静な判断や本音ベースの議論などが十分でないまま、抽象的なイメージで進んでいる。

30 年先に活気あるまちを維持するためには、建前でなく浜松の強みの源泉を客観的に見出し、本質を捉えたメリハリある施策を展開すべきである。また、市の職員にはもっと専門性を高め、民間に出ても通用するだけの力を育成するとともに、適材適所で人員を配置するような人事システムを構築すべきである。



【田畑隆久さん】
30 年後には、今のよう一つのまちに定住することがなくなるのではないか。

子ども・青年・老人に 居場所があるまち…3 点



【浜松市への期待度グラフ】

●時代に合った公会計の確立を！

現在の公会計は、行政無謬・右肩上がりの経済を前提としており、変化が激しく経済や行政に余裕のない現状に合っていない。

行政と民間の役割分担や、使命を終えた事業のスクラップ&ビルドが求められている今、公会計にもフローだけではなく、ストックの概念を取り入れ、発生主義や期間損益の理念が反映され、市の経営状況を正しく表した会計を実現することが求められている。

今以上に民間委託を進め、民間並みの効率的な行政経営が可能となり、ひいては、30 年後を見据え、負の遺産のない財政基盤の強いまちを実現できる。

つつみ たかし
堤 京さん

浜松市自治会連合会副会長／北区自治会連合会会長
三ヶ日地区自治会連合会会長／大崎地区自治会長
浜松市北区協議会委員／三ヶ日まちづくり協議会会長

●地域の特性を活かしたまちづくりを

浜松市は、工業、商業、農林水産業、文化芸能、すべての分野において全国トップレベル。様々な得意分野があるのは強みである一方、地域ごとに特色が異なることの表れでもある。市として一つにまとめるのは難しく、各地域の特色を活かすべき。

抱える問題も、地域によって異なる。三ヶ日では施設の有効活用や防災などが課題となっている。行政には、各地域の事情を理解し、柔軟な施策を打ち出してほしい。



【堤京さん】
三ヶ日では、定年退職後、みかんづくりをする人も少なくないと語る。

●シニアパワーで「絆」の見えるコミュニティづくり

近年は、異業種間の交流や、「向こう三軒両隣」のご近所づきあいなど、横のつながりができていないと感じる。高齢化・核家族化が進む中で、人と人とを結びつけるのは難しい。特に、仕事の第一線を退いた人たちが、うまくコミュニティを築くことができるか心配している。

東日本大震災以降、「絆」という言葉をよく聞くようになった。希薄化している絆をもう一度取り戻そうという動きだが、絆は簡単に築けるものではない。希薄化したコミュニティを再構築するには、リーダーシップが必要。今こそ、シニア世代が、それぞれの地域でサロン活動や運動会・お祭りなどの世代間交流行事のリーダーとなり、力を発揮してほしい。

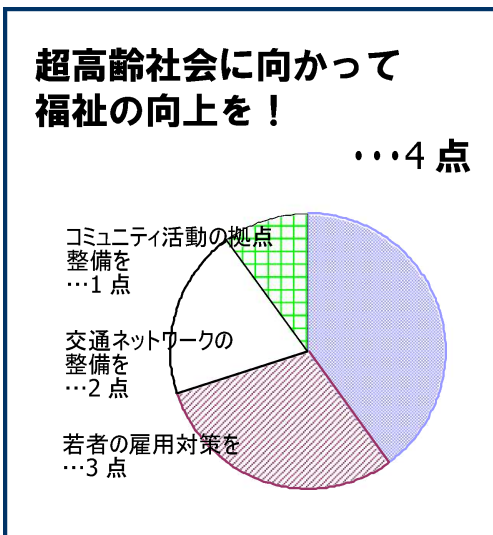
シニア世代が楽しみや生きがいを得ることができれば、健康長寿の社会づくりにも役立つ。余生の20～30年をいかに健康で有意義に暮らせるかが大切。高齢者の生きがいづくりや仲間づくりを応援する、シニアクラブのような組織を充実させてほしい。

●浜名湖全体で観光を盛り上げたい

浜名湖全体として、豊かな自然を活かす観光産業を成長させたい。浜名湖は立地条件が良い。日本のど真ん中だし、高速道路や新幹線などがあり交通の便も良い。人口減少社会において、観光は、流入人口を増やす重要な産業になるはず。

●交通弱者に優しい交通ネットワークを

高齢者が増えるということは交通弱者が増えるということ。現在、浜松の公共交通機関は、浜松駅を中心に放射線状になっている。放射線状の路線に加えて、放射線を横に結んでクモの巣状に整備し、交通弱者に優しい交通ネットワークをつくってほしい。



【浜松市への期待度グラフ】

つるみ ひでと
鶴見 英人さん

遠州鉄道株式会社 不動産事業部 不動産営業課

●浜松を魅力的なまちに

浜松市は自然が豊かで、気候も良く、非常に住みやすい地域である。まちなかを歩いては、知り合いに出会うこともあるが、頻繁に出会うわけではない。私はそういう浜松の規模がちょうど良く、暮らしやすいと思っている。しかし、残念なことは、駅周辺が寂しく、賑わいを感じられないことだ。私が子どものころは、目的を持ってまちに遊びに行けたが、今はまちなかに出て、昔ほど子どもたちを目にすることがない。浜松市が市外からも魅力的なまちだと思われるよう、市街地の開発や、公園の整備などしてほしい。



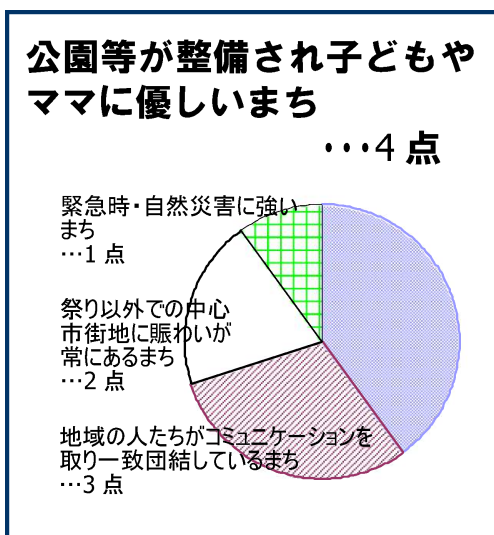
【鶴見英人さん】
地元で働ける環境を整備して、大学進学等で、市外に出た人が、地元に戻りたい、働きたいと思えるまちづくりをしてほしい。

●地元に戻ってこられるまちに

浜松市には就職先が不足しているように感じる。産業が発達しているまちなので、理系の就職先はあると思うが、文系大学に進んだ私の友人はあまり浜松に戻ってきていない。その中には、浜松市に戻りたくても就職先がないと思っている人もいるだろう。人口減少問題とともに、少子高齢化などの問題もあるが、地元の間人が一度県外に出たとしても、戻ってこられる環境をつくることができれば、まちの活性化につながるのではないかと。そのためには、新しく企業を誘致することも必要ではあるが、まず、企業が市外や外国に流出しないように、対策を図るべきである。

●浜松市の土地利用について

今後の人口減少を考慮すると、有効な土地利用が求められるだろう。それは、複合的で合理的な土地活用を推進することである。電車やバスの沿線の計画的な開発をしていくとともに、住宅地の周辺にスーパーを誘致することや企業誘致をきっかけに住宅地を整備するなど、単体



【浜松市への期待度グラフ】

で不動産を考えるのではなく、他の業態と組み合わせることにより、一つのコミュニティをつくり、住民に喜ばれるまちづくりができるとよい。沿線の開発については、調整区域も柔軟に建築できるように行政にも協力してほしい。また、郊外の農地は、後継者不足等により荒れて、放棄されているところもある。そこで、農地を一部宅地として使用できる制度をつくって、農地を売り出すことはどうだろうか。最近では都市部から自給自足の田舎暮らしを求める人もいる。それには現状の課題として農地の取引の活性化と手続きの簡素化などが必要になる。このような提案には様々な規制や法律の緩和などが必要となってくる。行政と民間が一体となって、市民が住みやすいまちづくりをしていきたい。

Dimas Pradi さん

コミュニティカフェチャンプル勤務

●伝統技術と共に生きる

インドネシアでは、伝統技術でつくられたバティック（ろうけつ染めの綿布）の服を着る機会がある。金曜日には子どもたちがその服を着て学校に通い、年に1回はその服を持っている人が全員着るような特別な日もある。また、「Made in Indonesia」以外の生産国は見たことがない。浜松市は注染染め・遠州綿紬といった伝統技術があるので、市をあげてもっと活用すれば良い。バティックとコラボするのも面白い。



[Dimas Pradi さん(左)とご両親]
地域のための無償活動より、ニーズをつくりビジネスに繋げたいと語る。

●80 か国のポテンシャル

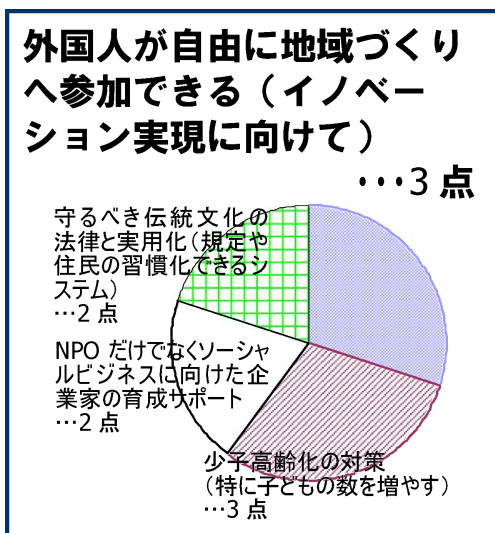
浜松市は 80 か国の外国人が暮らしており全国的に珍しい。80 か国のポテンシャルを活かせる場がほしい。自分はコミュニティカフェという形で多世代・多文化の交流をコーディネートしている。市は多くの外国人が集まる教会や催しで情報を発信するなど、外国人市民が情報を得やすくすることも重要である。

また、外国人が主体的に事業を展開できるような地域になってほしい。現在、浜松市ではブラジル野菜を育てる農家の方もいる。外国人と日本人が共に築き上げる社会を目指すために、外国人から生まれるイノベーションに期待している。

●教育面での支援

学校の先生で「外国人＝支援が必要」というイメージを持っていると時おり感じたことがある。そのようなイメージを取り除きたい。NPO が学校へ支援に入るようになったが、外国人支援を NPO に任せきりにするのではなく、例えば、学校側そして保護者と協調できるような活動ができれば良いと思う。

また、親世代は出稼ぎのために来日したという印象で、その子ども世代は成長していく基盤が日本であるため、世代によって日本に対する考え方が違うと感じる。親が子どもの将来（可能性）のためになにができるかを考えられる仕組みが必要だ。



【浜松市への期待度グラフ】

●各地域で多文化共生

外国人市民が届出の提出等で必要にならない限り市役所へ足を運ぶことは少ないだろう。また、市の広報誌においては翻訳言語が限られているため、市民サービス情報を大いに活かせていないと感じる。さらに、多文化共生事業を集中的に行っている浜松国際交流協会の情報を知らない人も多い。協働センターなど、地区レベルで情報発信や多文化共生できる場を広げてほしい。

どばし とみよ 土橋 登巳代さん

環境省 環境カウンセラー、省エネルギー普及指導員、
地球温暖化防止活動推進指導員、環境学習指導員
NPO 法人エコライフはままつ

●浜松市の誇れるところ

浜松市は、自然豊かな佐鳴湖・浜名湖ガーデンパーク・森林公園など緑も多く、子育てには素晴らしいところだと思う。また、浜松まつりや横尾歌舞伎など、伝統のあるお祭りや郷土芸能についても、この先大切に継承してほしい。

最近では、地球環境を考慮した地産地消のバイオマス発電やメガソーラーなど積極的に取り組んでいて、是非、続けてほしいと思っている。



【土橋登巳代さん】
多種多様な環境に関する取り組みを積極的に行っている。高齢者にもう一度社会貢献出来る「人間リサイクル」を推奨している。

●不妊治療に効果的な支援を

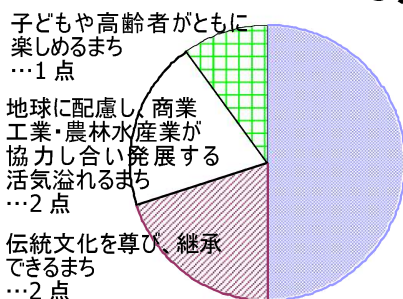
少子化が問題となっているのに、費用の掛かる不妊治療に対しての助成がまだまだ不十分だと思う。身近な人の中にも、子どもが欲しくても金銭的な問題で不妊治療を受けることが出来ずに、出産を断念する人もいと聞いている。また、出産の適齢期の問題が最近話題となっている。行政としては、高齢出産の危険性に関する啓発活動の充実や、ある程度の制限を設けた不妊治療補助制度の実施といった、適齢期の出産を促すような政策を講じることで、不妊治療への効果的な支援を打ち出してほしい。

●高齢者が進んで出かけられるようなくみを

高齢者はどうしても家に引きこもりがちになってしまう。公民館の空いている部屋を開放して、知らない人と話すだけでもボケ防止になる。最近はスーパーマーケット等に避暑のために来ている高齢者をよく見かけるが、良いことだと思う。高齢者が自ら進んで出かけることが出来るように、シルバーセンターの活用や協働センター等で高齢者を対象とした教室などを推進してほしい。

美しい環境の中で、老若男女が互いに認め合い集うまち

…5点



【浜松市への期待度グラフ】

●美しい地球を次世代へ！

浜松市には、環境保全活動を引き継ぐ次の世代が少ない。次の世代を育てるためにも、学校教育の中で、子どもが自然にふれる時間や環境問題について考える機会を与えると同時に、指導者に対して、環境に関する知識を向上させる努力も必要だと思う。

また、環境問題の取り組みを、行政任せにするのではなく、まず、市民一人ひとりができることをやるのが大事である。環境問題に興味・関心を持っている人は大勢いるが、実際行動に移せる人は意外と少ないのが現状である。そこで、市民が「一寸だけ無理をする」ことが重要であり、地域一体となって盛り上げていきたい。

とよだ みつひこ
豊田 光彦さん

御菓子司 有限会社あおい 代表取締役

●今、浜松の歴史的価値が注目されている

静岡市では駿府城を会場としたイベントの開催など歴史と絡めたPRに力を入れている。これに比べて、浜松城の盛り上がりは物足りない印象であった。しかし、最近では市民が主体となって「家康楽市」を開催したり、市では「出世大名家康くん」を前面に押し出したプロモーションを行ったりと成果を挙げ、家康公ゆかりの地である浜松の歴史的価値がこれまで以上に脚光を浴びている。

●縮小する内需には人を呼び込んで対応

製造業の海外進出が目立つ。生産コスト・効率は向上し、企業の成長は見込めるが、地域経済への影響は必ずしも良いとは言えない。市民を対象に商売をしている職種からすると、地元製造業従事者の減少は、顧客数の減少につながる。この状況打破のためには、観光産業を盛り上げ、外から人を呼び込む仕組みづくりが必要である。「食」と「歴史」絡めた新たな文化、観光の創出が可能な素地がこの地域には整っていると考えている。

●浜松プロデューサーを探せ！

浜松には「食」・「観光」・「産業」・「農業」など自慢できるものが点として数多く存在しているが、これらが線になっていない。歴史的な価値も行政・市民それぞれが盛り上げるだけでは力が足りない。例えば熊本城は、城の前に大々的な熊本ブランドのショップがあり、観光客が欲しいものを手に入れやすい環境を整えている。言い換えれば、お金を落としてもらえる仕組みができています。しかし、浜松城には常設のおみやげ店がない。浜松駅にはあるが、駅利用者以外の需要を逃している。浜松の歴史的価値が注目されていて、浜松城にも多くの人々が訪れているのに、チャンスを活かせていない。浜松に数多く点として存在している資源を線で結び、プロデュースすることが出来る「仕掛人」の存在が必要である。新東名高速道路や三遠南信自動車道の開通で交通アクセスが向上している今、「〇〇のために浜松に行く」という武器が一つあれば、浜松は観光地として大化けする。

浜松の歴史的資源の価値の再認識を！

…5点

「メイドインハマツ」の価値を全国に広めたい
…2点

観光に軸足を置いたプロデューサーの発掘・誕生
…3点

【浜松市への期待度グラフ】



【豊田光彦さん】

浜松の歴史、工業、農業、食は誇れるものばかりであり、1人のプロデューサーにより観光地として大化けすると語る。

●やらまいかブランドの意味

「小豆餅」がせっかくやらまいかブランドに認定されたが、まだまだ市民にも定着していない。これでは、全国へのアピールは当分先である。

「富士宮やきそば」だけで富士宮があれだけ盛り上がったのだから、「資源の宝庫」である浜松が、やらまいかブランドをはじめとした「資源」の価値を高くしていくことができれば、浜松の商品が全国に流通し、この地も全国からの観光客で活気づくだろう。

なかにし ひろゆき
中西 博雪さん

砂山町第3自治会長・砂山三友会街路樹愛護会 会長

●浜松らしいメリハリのある都市計画を！

昭和40年代に浜松に来て、まちの景観がバラバラで洗練されていなかったことが、非常に印象的だった。今でもその状況は変わっておらず、静岡市と比べても都市の顔として不適當である。

浜松まつりでは、みんな自分たちのまちに誇りを感じているのだから、幹線道路沿いなど、景観に関する規制を強化することで、市民が自分たちの住む浜松に誇りを持つまちづくりを進めてほしい。

また、浜松南部は津波被害が懸念されており、現状を見ても、新規の開発や発展は難しいと実感している。

30年後を見据えれば、三方原台地から金指までのエリアに、産業や住居の開発を誘導するような政策を展開してはどうか。

●人が集まる中心市街地を！

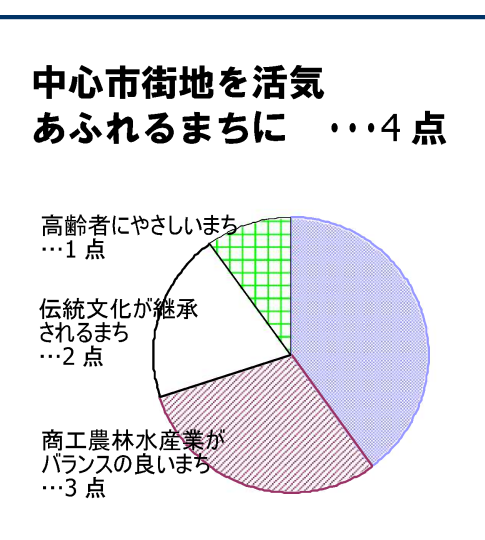
市民にとって思い入れの深い松菱が破綻して随分経つが、今の空き地の状態のままでは、発展が望めず市民全体が心配している。また、中心市街地の商店街は跡継ぎもおらず、独居の高齢者が住むシャッター通りとなっており、新しい取り組みの提案にも消極的である。

景気がなかなか上向かない中、中心市街地を活性化するためには、人が集まる仕組みをつくることが何より大切である。人が集まれば商業も自ずと活発になる。

市民が楽しむ場所を設けるため、例えば中心市街地に演舞場等を新設してはどうか。また、それとともに、駅と舘山寺、三ヶ日などを循環モノレールで結び、公共交通機関の利便を向上させ人々の移動を活発化させてはどうか。



[中西博雪さん]
砂山町は高齢化が進み、100歳を超えるお年寄りが3名もいる。



【浜松市への期待度グラフ】

●教育・スポーツの充実を！

近年、自治会活動などを見て、利己主義の人が増えたと感じる。

不景気の中、給料が伸びない一方で、子育てにお金が掛かり過ぎ経済的な余裕がないことで、家庭教育に悪影響を及ぼしている。学校教育においても保護者の不信感が高まるなど、将来を担う子どもの教育を見直す時期に来ているのではないか。

スポーツは体を鍛えるだけでなく、礼儀を学び他者とのコミュニケーション力を高める良い方法であるため、教育の場においてもスポーツを盛んにしてはどうか。また、スポーツを通じて浜松を有名にするため、全天候型のドームを整備してはどうか。

なかむら しんじ
中村 新治さん

在浜松ブラジル総領事館勤務

●海外へ浜松市のアピールを！

浜松市は大都市圏の真ん中にある。東京や名古屋などへのアクセスが有利で、富士山静岡空港も近くであり、海外への渡航も簡単。浜松市をもっと海外へアピールできれば、外資系の企業も増える。企業の職種が広がることにより、高校・大学もより専門的になる。そこから若者が増えることになり、まちなかの活性化に繋がるものと考えます。

●浜松まっりの引き継ぎ！

まず「浜松まつり」に驚いた。今まで住んでいたまちにはない、まちぐるみで一体感を持って参加のできる伝統的なまつりである。子どもから大人までの市民が全員で参加し、見る人・参加する人が全員で楽しんでいる。地域の子どもにも浜松まつりへの熱意が引き継がれているので、30年後にも伝統文化として残っていることを期待したい。

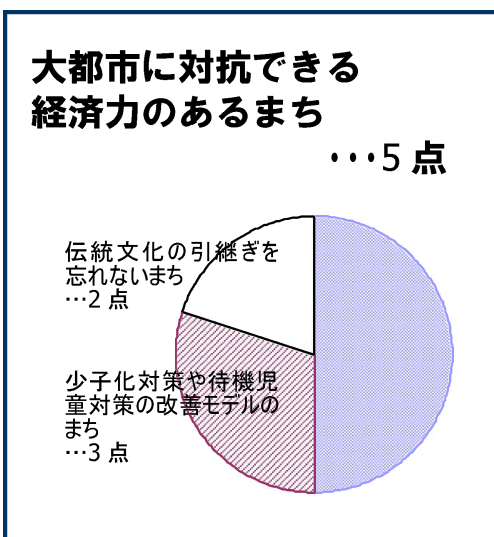
●コミュニティへの参加を！

町内会などのコミュニティへ外国人があまり参加しない。日本語が苦手な人は「自分が日本語を分からないことで、差別されるのではないか」と考え、行事の内容を確認せずに参加しない。回覧文書に難しい日本語が書かれていると、内容を見ずに次へ回してしまうこともある。町内会への参加を促すために、地域に住む日本語・外国語が話せる人と町内会が協力できれば、外国人がコミュニティへ参加しやすい環境が作れる。

また、子どもを通じて情報を伝える方法がベストだと思う。「子どもが賞をとったのでぜひ集まって。」と親を集めて、一緒にパーティを開いてしまうのも良い方法である。こうした小さなことからコミュニティへの参加をするのが良い。



【中村新治さん】
ブラジル総領事館のネットワークを活用し、積極的に浜松市のアピールを行っている。



【浜松市への期待度グラフ】

●子どもに安全な公園を！

子どもが一人で安全に遊べる公園が少ない。公園への道路が狭く、公園の遊具が老朽化していることが多く、とても不便を感じる。今まで住んでいたまちには近所に子どもが一人で安全に遊べる公園がたくさんあった。そんな公園を浜松市が設置・整備し、親子にとって住みやすい環境をつくってほしい。

なかむら みえこ
中村 美詠子さん

浜松医科大学健康社会医学准教授

●高まる「食」の重要性

浜松医科大学で疫学、公衆衛生学を専門とし、また自治体からの受託事業等にも関わり、大学の知を地域に還元している。時代の変化に対応し、精神的健康、社会的健康に対する健康づくりや、学校・産業・地域が連携した保健活動を模索する。

超高齢社会を迎え、単身世帯が増加する中、「食」の有り方が難しくなっている。地元浜松の農・漁業をこれまで以上に活用した健康的な食の展開が求められる。



●自然と共生し、歴史を活かしたまちづくりを

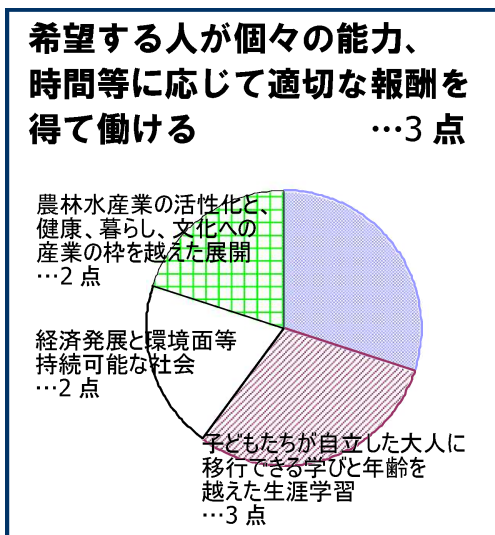
大学進学を期に横浜から浜松に来て、それ以来本市に住んでいる。ものづくりに支えられた文化や、自然豊かで食材に恵まれ、医療体制も充実しているなど、住みやすいと感じる。中でも、浜松に来て印象に残っているのは、水道水が美味しいということ。また、空気が澄んでいて、星空もきれい。今後とも豊かな自然との共生を持続していきたい。

一方、中心部に関しては、“まち”としての魅力に乏しく、“まちぶら”ができない。バスも浜松駅を中心に放射状に伸びており、横の動きがしづらい。自家用車を持たないと生活の利便性が低下する。“肴町”や“鍛冶町”など、歴史を感じさせる町名も多く、歴史のある都市として、それらを活かしたまちづくりを期待したい。

●緩やかな人々の結びつきが必要

義務教育においては、学校、教師が“わかりやすい評価”を求める傾向にあることを危惧している。普通から外れる子、目立たない子を、温かい目で見守り、支え、育てくれる教師は貴重な存在であるが、学校内外で評価されにくいのではないかと。このような現状を変えていく取り組みが何かできないか。働き方、学び方を含めた生き方の多様性を可能とし、認める社会になることを願う。

また、これからの社会では、上の世代と同じような地域、家族の関わりを求めることは難しいと感じている。地域でも家族でも、それぞれが社会の構成員であることを実感できる、緩やかな人々の結びつきが必要となるだろう。



【浜松市への期待度グラフ】

なかむら ゆきこ
仲村 由紀子さん

浜松市食育ボランティア・ハートフルみどり会長

●食育を通じ、伝統文化を伝える

食育ボランティア活動に携わり約 30 年。現在、市内協働センターにある食育ボランティアの連絡協議会の代表をしている富塚地区では、30 名が子ども、親子、高齢者を対象とした料理教室の講師を務めるなど、食育を通じた伝統文化を次世代に伝える活動を行っている。食育の大切さは年齢を重ねるとともに実感し、分かってくるもの。若い世代が栄養バランスのとれた、日本特有の食卓を提供するなど、我が子に食育の大切さを伝えていってほしい。



●一人暮らしの高齢者世帯が孤立しないために

食育ボランティアのほか、民生委員、保護司などを務め、最近、地域に空き家や一人暮らしの高齢者世帯が増加していると感じる。一人暮らしの高齢者は今は自立し、しっかりとした人も多いが、人と人との出会いの大切さを感じ、高齢者同士が交流できる暮らし方が増えれば、孤立しないようになる。また、ボランティア活動や各種活動の担い手がいらないのも、最近の悩みのタネ。若い世代が仕事や育児で追われていて、余裕がないのは理解できるが、地域の活動にも目を向けてほしいと感じる。

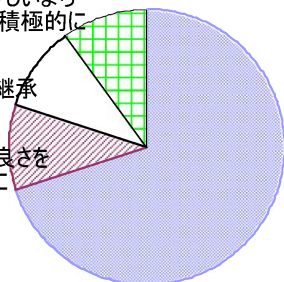
●駅前に高齢者が買い物できる場所が少ない・・・

一昔前の浜松駅前には、松菱、西武などの百貨店があり、買い物に行くなら駅前が当たり前だったが、現在はまちなかに出る機会がほとんどない。高齢者が買い物できる場所も少ないと感じる。青少年育成センター補導員として、まちなかで若者をビシビシ補導していた頃もあったが、最近では、若者を見かけることも少なくなっている。中心市街地の活性化と、まちなかへ向かう交通網の整備について真剣に考えていかなければならない。

中心市街地の活性化と 交通網の整備

・・・7 点

高齢者にやさしいまち
サロン活動を積極的に
・・・1 点
伝統文化の継承
・・・1 点
自然環境の良さを
より多くの人に
知ってもらおう
・・・1 点



【浜松市への期待度グラフ】

●将来を担う子どもたちのために

私たちが育った時代は、親以外にも教師、地域の人たちが、地域の子どもたちを厳しくも優しく接してくれた。

食育ボランティアなどの活動を通じて感じるのは、最近の子育て世帯は、共働きも多く、母親たちが大変忙しいということ。時代の流れなのかもしれないが、時には我が子とじっくり話したり、抱きしめてあげたり、深い愛情をもって接してほしい。

将来を担う子どもたちが、心身ともに健やかに育つことを願う。

なかやす ちあき
中安 千秋さん

なかやす牧場

●何でもあるまち、浜松

浜松市は温暖であり、海の幸かや山の幸まで食べ物は多種多様でどれもおいしい。自然環境だけでなく、ちょっと出掛ければショッピングセンターもあり、買い物にも困らない。住みやすく、何でもあるまちという印象である。

●その浜松にないもの

浜松市は工業も盛んであり、働く場所にも困らないため、若者も多い。ただ、私の娘は東京でファッション関係の仕事をしており、浜松にはそのようなクリエイターが働く職場が少ないように感じる。かつては織物のまちとして栄えた浜松市であり、これほど住みやすいのだから、ファッションデザイナー等のクリエイター育成に力を入れれば、新しい産業の発展も可能性があるのではないか。

●モノの買い方が変わってきている

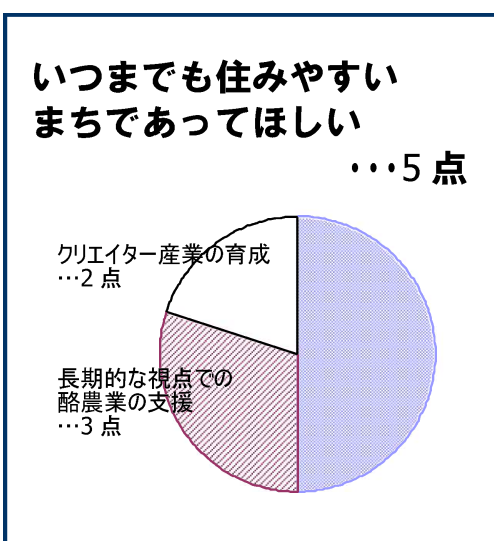
これまでは、商品の卸を中心に行ってきたが、知人からウェブデザイナーを紹介され、今年からインターネット通販も始めている。若い世代の方はインターネットでの買い物に抵抗がないように感じるし、新東名が出来てからは特に遠方からもお客さんが来てくれる。そうした人が、商品を気に入ってもらえれば、地方発送という手法も効果的と考えている。

●何事も気遣いが大切

第1次産業は臭いの問題など、近隣のつきあい方が難しい。こちらが先に住んでいたのだからといった姿勢でなく、お互いに気を遣っていければ、共存も可能である。また、商品開発でも、お客様が本当に欲しいものに気づき、見極め、つくってあげれば、値段で勝負をしなくても、気に入ってもらえる。



[中安千秋さん]
自然に逆らうことなく、長い目で成長できる酪農施策が必要と語る。



【浜松市への期待度グラフ】

●自然に逆らわない酪農をしたい

食の安全が注目されるようになった影響なのか、出荷する牛乳への基準も規制が高まっている。安心で安全な食品を提供するのは当然のことではあるが、供給者サイドの視点では疑問を感じる規制も存在する。求められる基準を満たすため、暑さが苦手なホルスタインに対して夏に無理をさせ、乳牛としての寿命を縮めてしまうこともある。ホルスタインの特徴をしっかりと説明すれば、消費者は年間を通じて牛乳の質が変わることも理解してくれると信じている。そのような自然に逆らわない酪農をすることで、長い目で見たら、酪農の発展につながっていくのではないか。

なかやま あきひと
中山 彰人さん

浜松倉庫株式会社 代表取締役社長



●ニッポンの中心にある都市、ハママツ！

浜松は、雪が降らないことなどの気候面や、東京と大阪の中間であり、高速道路・鉄道などの交通の便が良いことなど、物流業にとっては非常に条件の良い立地である。

●何でもそろっていて「特色」が出せない！

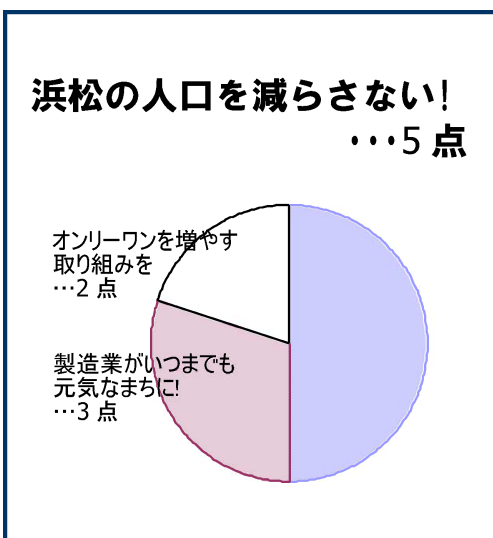
浜松市は繊維産業、楽器産業、自動車産業と、技術の発展に伴い新たな基幹産業が生まれてきた土地である。館山寺などの観光地もあり、農産物も海産物も高品質で種類も豊富である。しかし、贅沢な悩みでもあるが、逆に何でもありすぎて「浜松の特色」が出しづらいのではないかと。行政も様々な産品をプロモーションしているが、その影響で「浜松といえば〇〇」といった代表格がない。日本初となるものができるくらいのインパクトが必要である。

●人の一生が浜松で完結するように

全国的な人口減少を食い止めることは難しいと思うが、浜松もそれにお付き合いをする必要はない。浜松の人口を減らさない取り組みが必要である。ものづくりのまちとして、生活の基盤である雇用創出を優先して行う。また、老後も安心して住めるまちにすることにより、定年を迎えた方々の浜松への移住が期待できる。雇用の充実と高齢者に優しいまちづくりを行うことで、ゆりかごから墓場まで、人が安心して一生を過ごせる浜松になってほしい。

●まずは何よりも製造業！

「ものづくりのまち浜松」をずっと守っていき、更に成長させていくことは、物流業の成長にも繋がる。まずは製造業の成長が優先であり、物流業は製造業を迫っていくもの。県の内陸のフロンティア構想では、物流業にスポットを当てているが、その業界で仕事をしている人間からすると、モノを生み出す仕組みづくりが先ではないかと疑問を感じている。



【浜松市への期待度グラフ】

●浜松版「Amazon」

行政サービスの向上と効率化を同時に進めるためには、中山間地域などで、これまでの「来庁型」の行政から、「訪問型」の行政への転換も一案ではないか。それにより、近くに市役所の機関がなくても市民は不便を感じることはなくなり、ルートが確立できれば、民間による配送事業への展開にもつながっていく。

なすだ まみ 那須田 摩美さん

法政大学地域研究センター客員研究員

まちづくりコンシェルジュ

●浜松マダムに文化的刺激を

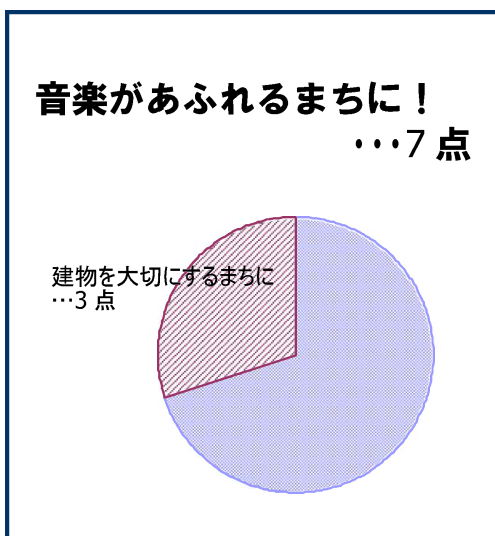
平成 23 年度に舞阪町で、浜松ゆかりの脚本家・演出家・音楽家などとコラボレーションし、シニアと子どもたちによる音楽劇の公演を打つ。地域のイベントで活躍しているのは、いつも同じ人のような気がして、眠れる人材が出てきてくれればという思いから、参加者を募ることにした。それまで、テレビの前でのんびりしていたおばあちゃんたちが、出演者やスタッフとして公演に参加し、生き生きと活動するのを目の当たりにし、地域に根ざした文化活動を展開させていきたいと思った。

昨年度は、まちなかの空き店舗を利用して、日替わりのイベントスペース「まちなかガーデンズ 01」を運営。近年、まちなかに移り住む高齢者が増えているが、病院とマンションの行き来だけという人が多い。そんな人たちが、まちなかガーデンズで文化講座をやっていると足を止めてくれた。

今のまちなかは、夜の飲食街になっており、昼間は閑散としている。しかし、60 年代頃にはお茶やお花の教室がたくさんあった。「まちなかに出て、午前中は教室でお稽古をして、ランチを食べ、買い物をして帰る」のが主婦層の定番パターンだったと考えられるが、今はすべて郊外で完結している。まちなかに若い世代が集まる場所はできてきたが、中高年世代の交流の場がないと思うので、マダムたちがおしゃれをして出てくる場所をつくりたい。

●音楽人口の多さを活かして、音楽のまちづくりに+α

今、浜松では、音楽家のコンサートがたくさん開催されているし、やらまいかフェスティバルやプロムナードコンサートなどの取り組みも素晴らしい。それに加えて、もっと市民が日常的に音楽を楽しむことができれば。浜松には、幼い頃から音楽に親しみ、楽器を演奏する人が大勢いるので、その存在を活かしたい。例えば、素人が気軽に弾けるピアノ喫茶や、いつも生演奏を流している FM 放送局があると良い。浜松らしさを出すことができると思う。



【浜松市への期待度グラフ】



【那須田摩美さん】
大学の研究員として日本各地を訪れる機会も多い那須田さん。浜松では音楽を中心としたまちづくりに取り組めるのが嬉しいと語る。

●古い建物と文化の融合を

浜松のまちなかは、戦後復興をきっかけに建てられた共同建築（隣接する住人と共同で建てたビル）が多いのが特徴。古い建物を壊して綺麗なまちなみを整備する方が良いと考える人もいるかもしれないが、それでは他のまちと同じになってしまう。長い歴史の中で形成されたまちなみだから、浜松らしくて趣がある。多くの共同建築の、当初、居住スペースとして使用していた 2・3 階部分が、今はほとんど空いている。このようなスペースを有効活用して文化的な取り組みができれば面白いと思う。

の ず え よ し こ
野末 芳子さん

株式会社マッキンリー 管理部総務課総務グループリーダー

●ワークライフバランスへの取り組み

1939年創業、今年で74年目のメーカー。ワークライフバランスを取り組むきっかけは、会社の現状として①男性社員が多い②社員の平均年齢が37歳で出産・子育て世代が多い③共稼ぎの家庭が多い、等が見受けられ、男女を問わず子育てしやすい環境づくりが必要と考えたことによる。将来的には、育児休業もさることながら介護休業が重点となると予想している。厳しい経済状況が続く中、未だ取り組み途上ではあるが、フレキシブルな働き方や、女性が活躍する領域をより一層広げていく事で、家庭の安定が仕事への集中に結びつき、ひいては企業としての収益アップに繋がるよう進めたい。

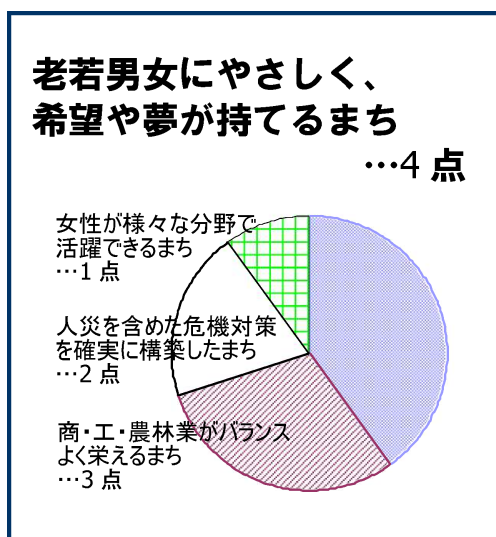


●弱みも活かす発想の転換が必要

製造業のまちとして発展を遂げてきた浜松市であるがゆえ、サービス業や文化・芸術面を楽しむ要素が少ないと感じる。静岡市は商業・文化のまちだが、浜松市は工業都市とまでは言えず中途半端さがある。政令指定都市として今後もっと活性化するためには、地理的に東京・大阪のちょうど中間にある利点や、風光明媚、温暖な自然環境の恵みを活かし、市内外からどんどん人が集う魅力的なまちづくりを推進してほしい。また、弱みを活かす発想の転換や市民同士が積極的に知恵を出し合う必要がある。

●住民の声を聞き、長期ビジョンの策定を

これからの30年は、想像ができないくらいの速さで時代が変化していくだろう。その中で、



【浜松市への期待度グラフ】

浜松市が活性化し進化を遂げていくには、長期ビジョンをしっかりと考えることが重要。長期ビジョンの策定には、関係者のみならず「やらまいか精神」にある前向きな住民の声にもしっかりと耳を傾けてほしい。現在の浜松市は広域で、すべてをきめ細かく管理・把握することが難しいように感じる。区ごとに政策を考えるのもひとつだが、分野（産業、文化、郷土芸能、農業、自然環境など）として整理し、エリア分けすることも時には必要ではないか。浜松で生まれた産業や文化を出来るだけ絶やすことなく守っていくとともに、後世に伝え発展させ、将来的にも価値あるものに育てていきたい。

は か まだ こずえ
袴田 梢さん

育児サークル パオパオ代表



[袴田梢さん]
子どもとママたちが楽しめる居場所づくりを目指して、南陽協働センターを中心に活動中。現在のメンバーは親子で40人ほど。東京都出身、2児の母。

●浜松と東京と比べてみて分かること

浜松の印象は緑が多く、のんびりして子育てもしやすいところ。家の周りには田んぼがあり、少し離れたところに公園があり、大きな幼稚園もあるので環境的に恵まれていると思う。

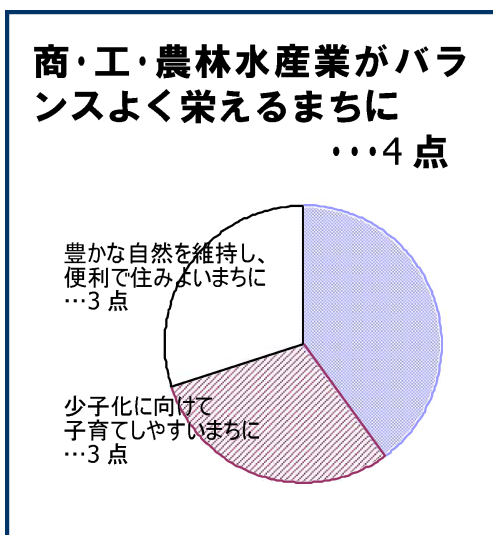
東京に比べて、浜松では電車もバスも限られていて、車がないとやはり不便に感じることもある。特に荷物が多い子育て中の家族には、車が便利に感じるもの。例えば、浜松駅周辺の駐車場を安価にしたり、浜松こども館の駐車場代を無料にしたりしてくれれば、利用しやすくなると思う。

●大きかったパオパオの存在

サークルに入って思ったのは意外と地元の方より、他からきた方が多いこと。地元出身ではない私にとって、子育てをしていく上でパオパオの存在は大きかった。誕生会やダンボール電車、風船で遊ぶイベントなどで皆さんと週に一度顔を合わせて、一緒に遊んで食事をして仲良くなれた。妊娠中には、サークルの方が気遣ってくれて、車で迎えに来てくれたこともあった。

●子どもとママの目線で楽しいイベントに

これからのパオパオの活動として、近くの消防署にお願いして、AED（自動体外式除細動器）を含めた心肺蘇生の講習会を取り入れたいと考えている。それから、土や砂が苦手な子になってほしくないの、泥まみれで遊ばせたい。農家に協力をお願いして、子どもたちと一緒に野菜を育てて、実際に食べてみて、食に関する知識を高める「食育」にも取り組んでいきたいと思う。今後とも、年齢に合わせて活動内容を変えながら、まず子どもたちが楽しみ、続いてママも楽しめるような、2つの目線でイベントを企画していきたい。



【浜松市への期待度グラフ】

●始めませんか？大家族化

核家族化が進んでいる中で、提案したいのは大家族化。核家族には、しがらみの無い生活や自由なイメージがある一方、親が子育ての悩みを抱え込み、大変になってしまうこともある。大家族には家族ぐるみで子育てを支え、助け合える良さがあり、子どもたちにとっても祖父母などと接することは良い経験になると思う。

私の家は6大家族。主人の実家に同居しているのでとても助かっている。皆さんも大家族化を始めませんか。

は せ が わ と も ひ こ
長谷川 智彦さん

一般社団法人天竜建設業協会 会長

●「山」は市民共有の財産！

浜松は、市域の過半が山地であり、浜松が誇る豊かな自然環境の魅力の一つとなっている。

また、市民生活の基盤をなす豊富な水資源や、数多くの特産物などは、天竜の森林によるところが大きい。現在、中山間地域の住民が、山林の管理を担っているが、高齢化や過疎化により、年々厳しくなっている。

何年か前、外国資本による山林買収が問題となった。また、今後も相続などで不在地主が増え、放置された状態が続くと、山が荒れ、元に戻すのが大変となる。下流の都市部にも様々な影響が懸念されるため、山林を市民全体の財産と位置づけ、管理者となる中山間地域の住民の活動を、市として支援してはどうか。



●地域の頭脳を活用したインフラマネジメントを！

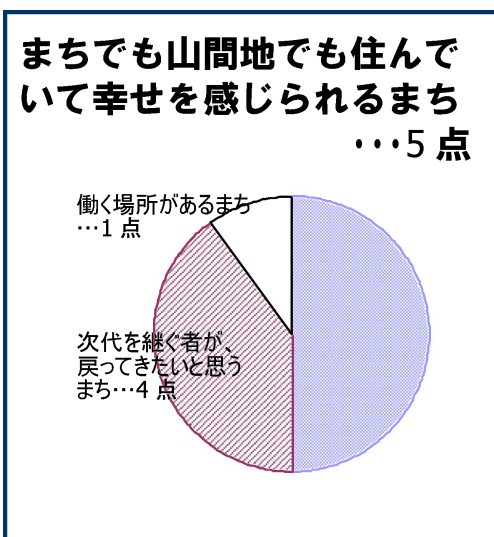
天竜区では橋梁などインフラの老朽化に関連したニュースが相次いでいる。近年、台風や集中豪雨など自然の脅威にさらされており、また、三連動地震など、自然災害への対応が市民にとって最重要課題となっている。今後、30年を視野に入れ、インフラをどのように維持更新し、災害に対応していくかを、考え直すべきと考える。

インフラは、地形や立地場所などの特徴を経験的、体感的に理解した上で管理することが最も効果的であり、特に自然災害時は、これを理解する地域の業者と行政が迅速に連携し対応することで、被害を最小限に食い止められる。ぜひ、そうした危機管理の視点も加味しつつ、インフラマネジメントに地域の頭脳を活用することを考えてほしい。

●多彩なライフスタイルを！

若者たちにとって、利便性、効率性を重視した都会での生活でなく、山や川に囲まれた自然の中で子育てするような、田舎暮らしへのあこがれは、多いのではないかと。浜松は、都市部から中山間地域を有し、豊かな自然環境と多様性を有しているのが特徴だが、近年、効率化を進める中で、地域コミュニティの核となる学校や行政窓口がどんどん減ってきている。核を失うと、そのコミュニティは縮小、そして消滅へと推移してしまう。

次代を継ぐ若者たちが、望む多彩なライフスタイルを送ることができるよう、中山間地域への定住誘導策をはじめ、大きな視野を持って、まちづくりを進めてほしい。



【浜松市への期待度グラフ】

は た の ち づ こ 波多野 千津子さん

浜松北地域まちづくり協議会会長
北区女性団体連絡協議会副会長

●まちづくりに女性の声を

北区は、3つの旧自治体と旧浜松市の一部地域でできた行政区。合併当初は、それぞれの地域性にギャップを感じたが、区協議会や北区女性団体連絡協議会などでの話し合いを通じ、ずいぶんと溝が埋まった印象がある。

北区女性団体連絡協議会は、女性の意見をまちづくりに反映させるために立ち上げた。旧自治体の垣根を越えて集まった女性たちが、様々な地域課題に取り組んでいる。



【波多野千津子さん】
北区の小学生 688 名による、同一会場・最
多人数の鍵盤ハーモニカ同時演奏のギネス
世界記録成立に尽力した。

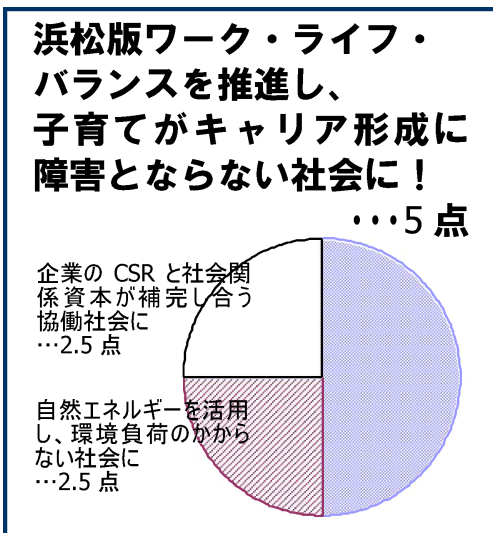
●子育て支援を充実させ、男性も女性も働きやすい社会に

今後、人口が減少していく中で、女性の力は社会にとって不可欠なもの。男性も女性も、子育てがキャリア形成の障害にならないことがますます重要になってくる。

しかし、現状では、育児休暇を取得しにくく、育児退職する女性が多い。一度退職すると正社員への復帰が難しく、能力のある女性がパート・アルバイトに回っている。また、育児休暇からの復帰後、子どもを保育園や放課後児童会に預けられず困っている女性も多い。

女性が育児休暇を取得しやすい環境を整えるとともに、男性の育児休暇取得を促進したい。夫と妻が交互に休暇を取るのも良い。また、子育て世代が安心して働けるよう、待機児童の解消や放課後児童会の定員拡充、病児保育施設の増加などに取り組んでいかなければいけない。行政には、現場の声を反映する施策を行ってほしい。

企業の取り組みにも期待したい。浜松でも、特色ある取り組みを行う中小企業が増えてきたが、まだまだこれから。企業が自信を持って、子育て支援や、オリジナルのワーク・ライフ・バランスを打ち出せば、優秀な人材が集まると思う。例えば、企業内保育所の設置。一社では不可能でも、複数社の合同でなら設置できるかもしれない。社員のキャリアを継続していくことは、会社にとっても得になるはず。



【浜松市への期待度グラフ】

●希望の持てる農業で後継者育成を

浜松は農業都市でもあるが、耕作放棄地が増えた印象。先進国では人口が減少していくが、中進国、途上国では今後も増加する。輸入品に頼っているのは、食糧が得られなくなる可能性もある。6次産業化など、希望の持てる農業経営を広め、後継者を育てていく必要があると思う。

はだの みさこ 羽田野 美沙子さん

子育てサークル 元ままびりおん代表



【羽田野美沙子さん】

職場復帰に伴い、「ままびりおん」を一時終了させ、新たな展開を模索中。1児の母。豊橋市出身。

●「ままびりおん」から「ままびりおん」へ

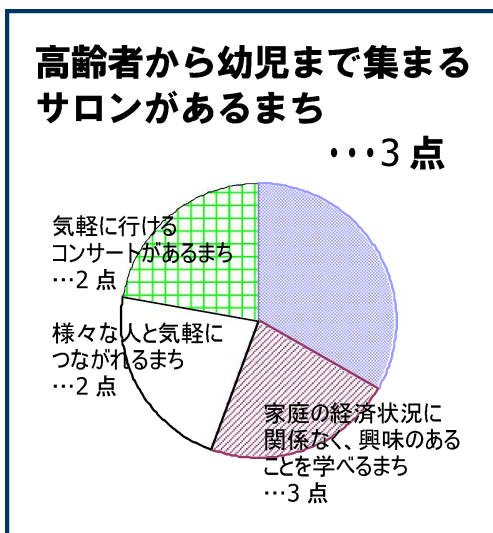
当初「ままびりおん」の名称でブログを書き始めたら、多くの子育て家族が読んでくれた。ママたちが集まれば、もっとたくさんことができると思い、「ままびりおん」に桁を上げて、サークルを立ち上げた。子育てママの活動を中心として、子どもと一緒にお寺での法話とベビーマッサージ、パン・うどんづくりなど、家族で楽しめる活動を進めてきた。私の職場復帰に伴いサークルが一時終了となるけれど、活動を通じて知り合った仲間とのつながりを大切にして、新たな形態を模索したい。具体的には、月1回ではなく、季節ごとに集えるようなものも考えていきたい。

●明日が楽しみになるような気持ちを子どもたちへ

将来、地域に小さなサークルがたくさんできて、子育て世代だけでなくいろいろな世代の人と交流できるような場所ができればいいと思う。大人たちがまず楽しみ、おもしろい大人の姿を子どもたちに見せるような活動は、子どもたちもきっと楽しめるはず。常に子どもたちには「明日が楽しみになるような気持ち」を持ってもらいたいと願っている。

●できたらいいな！人材のマッチングシステム

市外からの転入した子育て世帯や高齢者世帯が、地域から孤立することもあると考える。住んでいる地域に根差し、人をつなぐシステムづくりが必要ではないだろうか。子育て中の母親、定年退職者、専業主婦、会社員などの中で、夕方だけなら、休日だけなら、子どもが一緒でも良いなら、持っている能力を提供できる人も数多くいる。その人たちが気軽に活躍できて、地域の人の要望に応えられる人材マッチングシステムがあったら素敵だと思う。



【浜松市への期待度グラフ】

●「待つこと」と「交わること」

子育てで大切なことは「待つこと」。大人の都合で急がしたり、決め付けたりして、できる子をできない子にする必要はないと思う。大人は子どもの成長を見届けるため、待つことが大切ではないだろうか。

現在の子育て支援は、子育て世代だけが集まること一般的。地域の皆で声を掛け合い多世代が交流し、交わることで子育てができるようなまちになってほしい。そのために誰でも集えるサロンのような場所の創設と定期的なイベントの開催が必要だと考える。

ば ば 馬場 さかゑさん

職場研修講師

●社会人が Levelup できるまちづくり！

社会人教育に携わっているが、東京では人気の高い講師の研修であっても、浜松では反応が今ひとつということが多く、もったいないと感じることがある。

浜松の経済を活性化するためには、働く人たちの態度や、モチベーションをより高めることが、何より重要と考える。

浜松は、東京や名古屋から近く、交通の便が良いので、例えば、アクトを活用し、全国的にも人気のある講師を集め、継続（常設）的に高いレベルの講習を開催するなど、社会人教育のメッカとなる仕掛けを打ってみてはどうか。

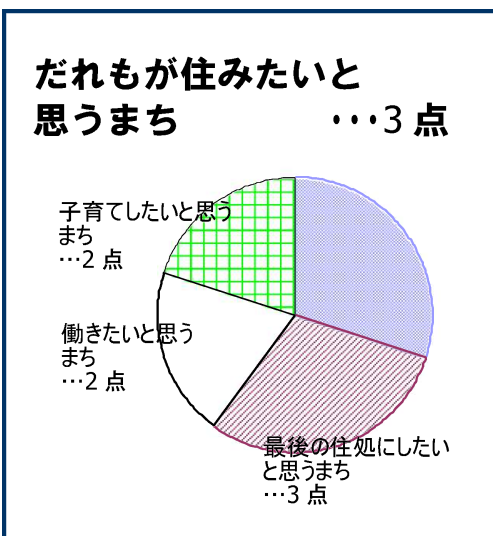


●びっくりするほどの「感動」を！

浜松は、風光明媚で温暖な自然環境等の魅力を持つ。しかし、駅前やまちなかを見ると、統一したまちづくりの理念が感じられず、市外からのお客様にとって特徴に乏しいまちとなっている。

企業は、単なるスローガンに留まらず、社員全体が一つの理念を共有し、全社一丸となって実践することで、顧客に満足と感動を与えるサービスを提供している。まちづくりも同じ。欧州では、まちの住民が全員参加し、世界中の人があこがれる統一感のあるまちづくりの事例をよく見る。日本では、情緒ある温泉風情を味わえる黒川村が思いつく。

浜松も、地域の魅力を上手にプロデュースし、住む人には「郷土の誇り」を、訪れる人には、「驚き」・「感動」そして「元気」を与えられるようなまちを、オール浜松で築いてほしい。



【浜松市への期待度グラフ】

●市民の味方で信頼できる行政の実現を！

役所には、前例踏襲・杓子定規という批判がある。何かする際、壁となる固定観念があるのかもしれない。

以前、スウェーデンに住んでいたとき、福祉の相談で、職員ごとに対応が全く異なることに驚かされた。はじめは、その違いにストレスを感じたが、実は、現場の職員に広範な権限が与えられていて、市民一人ひとりの状況に応じて常識的に判断し、制度も柔軟に変えることができると聞き、納得し感動した。

まずは、市民に向き合い応援する姿勢で、行政を進め、それをわかりやすく示すことが大切ではないか。そして、市民との間に、信頼感が生まれ、皆が共感して活動するまちとなればすばらしい。

浜松開誠館高等学校生徒会さん

かよう 直貴さん（生徒会長） 井上 澄陽さん（書記長）
 いとう 健吾さん（ホームルーム委員長） 中本 梨花さん（書記）

●浜松市のイメージ

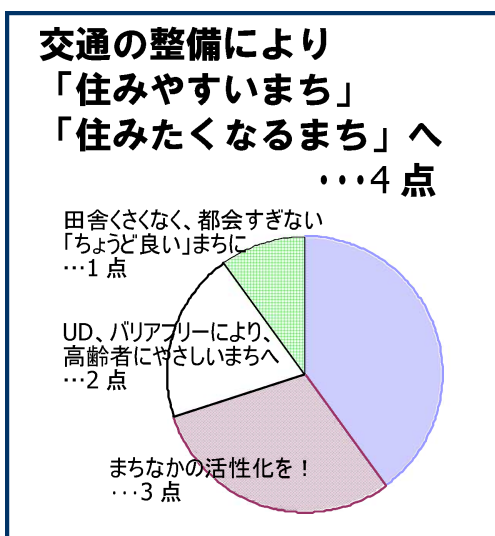
- 気候が温暖で、自然災害も少ない印象。自然環境に恵まれている。
- 「音楽のまち」と言われるように、ピアノを通じて国内外のいろいろな都市とのつながりがある。
- 音楽イベントも多い。
- 芸術文化は音楽だけではない。浜松市美術館は非常に良い展示をしている。しかし、手狭なこと、PRが足りないことで、人が集まりづらい現状はもっていない。
- ヤマハやスズキ等の有名企業の本社も有し、「ものづくりのまち」として工業が発達した都市である。
- 新幹線や東名高速道路など、関東・中京・関西を結ぶ交通基盤が整っている。
- 他市の人にとって、スズキなどの大企業は有名だが、浜松自体の認知度はあまり高くない。政令指定都市であるにも関わらず「準都会」と言われる。
- 大型ショッピングモールが郊外にできたからか、まちなかに活気がない。



【浜松開誠館高等学校生徒会のみなさん】
 3年生と2年生で構成する生徒会。生徒会長の加陽さん(写真右から2番目)を中心に結束力があり、仲が良い印象を受けた。

●交通の整備により「住みやすいまち」「住みたくなるまち」へ

- 市内交通については、駅までのバス路線が充実している。しかし、例えば大型ショッピングモールなど、郊外の拠点と拠点を結ぶ移動手段がない。
- 地域の拠点に対して環状にバス路線が形成され、各々を結ぶように交通ネットワークが組まれると便利ではないか。
- 自転車利用者にとっても住みやすいまちになってほしい。今は歩道と自動車道しかなく、走りづらい。
- お金が掛かっても、本当に必要なものは整備すべきだ。
- 自転車通学や電車通学などいろいろあるが、ルールやマナーを守ると共に、地域の人たちに挨拶を交わし、気持ちよく楽しく過ごせるようなまちにしていきたい。



【浜松市への期待度グラフ】

●高齢者にやさしいまちづくりを

- ユニバーサルデザインに配慮した、医療・福祉の充実したまちになってほしい。
- 福祉対策も重要だ。今、高齢者の孤独死が問題になっていることから、寄り合いなど、高齢者が集まれる場所をつくる必要がある。
- 地域の拠点にフリースペースを増やしたらどうか。高齢者を始め、みんなにとっての憩いの場として活用でき、世代間の交流にもつながる。
- 私たち若い世代が、高齢者にいたわりや思いやりの心を持って接するまちづくりをしていきたい。

浜松市立高等学校生徒会さん

生徒会長 鈴木 亮祐さん
書記長 黒木 光さん

●浜松市のイメージ

- 楽器産業や自動車・オートバイ産業、繊維産業などが盛ん。東名・新東名高速道路などの大動脈が東西に通っていることが産業発達の好条件だ。
- 浜名湖や遠州灘、中田島砂丘、天竜川、赤石山脈など、自然に取り囲まれ豊かだ。都市部も山間部もあり、日本の縮図だと学んだことがある。
- 静岡県は健康寿命日本一と言われるが、浜松市も気候が温暖でみかんや鰻といった栄養豊富な特産品もあってか、市民がとても健康的だと思う。

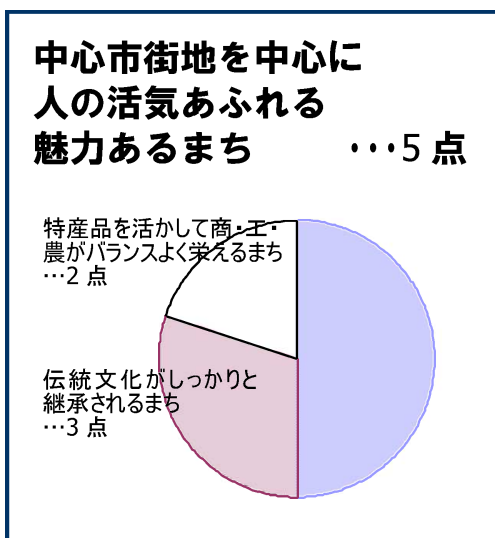


【鈴木亮祐さん、黒木光さん】
体育大会の準備のため、夏休みに入っても生徒会として精力的に活動中。

●活気があふれ魅力あるまちになるために

- 静岡市から浜松市に移ってこられた先生が「静岡市のまちなかは商店街を歩いて楽しみ、大型デパートにいける。郊外型の浜松市とは大きく違う」とおっしゃっていた。
- 京都に旅行に行った時、駅ビルには様々な店舗が入っており、見て回るだけで楽しかった。浜松駅周辺も商業施設が充実すると、人が集まり活気あふれる魅力あるまちになると思う。
- 関西出身の塾の先生に浜松のイメージを聞いたことがある。答えは「新幹線で通り過ぎるまち」だった。企業の誘致やデパートの充実により、新幹線を降りる「目的地」としてのまちになってほしい。
- 県外から誘客するには観光地としてのテーマパークが重要だ。フルーツパークは時の栖の運営によって人気が出てきている。三重県の「なばなの里」や御殿場市の「時の栖」はイルミネーションで成功している。ぜひフルーツパークもそれらに続いてほしい。
- 歴史的遺産を活かした観光産業にも力を入れるべきだ。例えば浜松城。徳川家康の過ごした出世城と言うことだが、坂本龍馬のようなキラキラしたイメージはなく、地味な印象。

大河ドラマなど、全国で取り上げられるとイメージも変わり、脚光を浴びるのではないかな。



【浜松市への期待度グラフ】

●地域と密接な関係をつくっていききたい

- 市立高校生徒会は、ボランティア活動の一つとして地元の広沢自治会と協力し、カーブミラーの清掃をした。また、選挙の投票所の手伝いにも参加した生徒もいる。
- 地域や市の事業に対して、協力する意欲がある生徒は多いはずだ。
- 市立ということもあり、生徒会として、今後、市の事業に積極的に関わっていききたい。そして、他の高校の先駆けとなり、さらに、周辺の県立・私立高校などとも連携していけたら良い。

はやし たくじ
林 卓司さん

一般社団法人浜松市医師会副会長（たく整形外科医院院長）

●患者のニーズに応えられるよう尽力

浜松市に、たく整形外科医院を開業して 17 年。常に患者に寄り添い、ニーズに応えられるような診療を心がけている。また、医療スタッフ全員が力を合わせ「心の通い合う医療」、「信頼できる医療」を提供し、地域の皆様から親しまれる医院、安心して受診できる医院を目指している。

今後、医学の分野では、遺伝子診断・治療や IPS 細胞に代表される再生医療が発達すると思われるが、クローン人間の誕生が危惧されるなど、より一層、生命倫理と調和した医学・科学技術の発展が望まれる。



●大らかで開放的な市民気質！

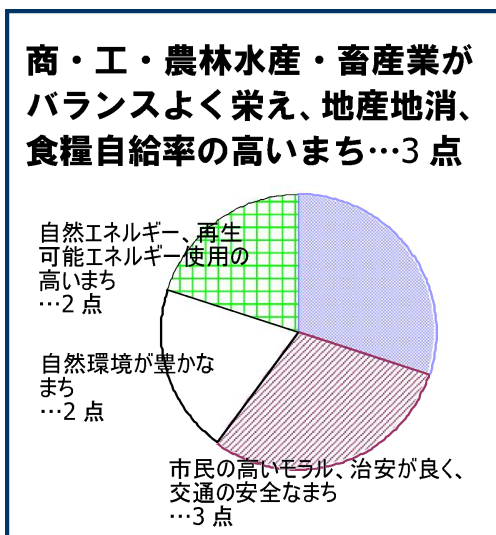
大阪から引っ越して来て感じるののは、人口規模が適当であり、大都市に見られるような弊害が少ないということ。浜松市民は大らかで開放的な気質を持っており、他地域から移住してきた人を、受け入れてくれる度量がある。転勤や進学で浜松に来て、そのまま住み続ける人が多いのではないかと。また、東西南北を豊かな自然環境に恵まれ、気候温暖で地の利を活かした産業がよく発達している。

しかし同じ政令市の静岡市と比較して、街並みに伝統や文化の香りが少なく、雑多な印象も受ける。これは静岡市が商業のまちとして発展し、浜松市は製造業のまちとして発展してきた歴史があるのだろう。それぞれの特色を感じる。

●大規模災害に備えた医療体制の充実

診察をしていると、ひとり暮らしで、健康面に不安を感じる高齢者が増えていると感じる。進展する高齢化、人口減少社会において、ひとり暮らし世帯も増加し、普段の買い物など生活面でのサポート体制が今後より一層重要になるだろう。

浜松市は、他の政令市に比べ、人口比で総合病院が多い。救急医療に関しても、症状に応じて医療機関が3段階に分かれて対応し、それぞれがネットワーク化されている。これは「浜松方式」と呼ばれ、救急医療体制が全国に先駆けて整備されるなど、充実した医療体制がある。現在、想定される大地震等大規模災害時の医療体制に対し、医師会としても整備を進めているが、より実効性のあるものとするため、行政と強力でタッグを組んで、万全の体制を整えられるようにしていきたい。



【浜松市への期待度グラフ】

はらだ ひろこ
原田 博子さん

NPO 法人はままつ子育てネットワークぴっぴ 理事長

●流行に乗らずにもっと特色を出して

浜松の独自性とはいったい何か。観光、中心市街地活性化など、どこの都市も似たような状態であり、他からの受け売りや流行に乗って、同じようなことをしていないだろうか。もっともっと、特色を打ち出し、PR をしていく必要性を感じる。

例えば、ものづくりでは、楽器や自動車産業などに関連した中小企業が多く、優れた職人気質があると思う。それを活かしたものづくりのマイスター大学をつくり、浜松に全国から人を集めて、育成してはどうか。

●女性の働きやすい環境づくりを

浜松は、温暖な気候に恵まれ、日照時間が長い。それを活かした太陽光発電や風力発電など、地域資源を活かした新(再生可能)エネルギー分野で雇用の場を増やすことが重要だと考える。今後の人口減少が明らかであるため、新しい雇用の場に女性が労働参入しやすい環境をつくっていくことが重要となる。女性の働きやすい環境づくりには、企業や団体等のトップの意識改革が必要だと考えている。

●親の収入で子どもの将来が変わるなんて

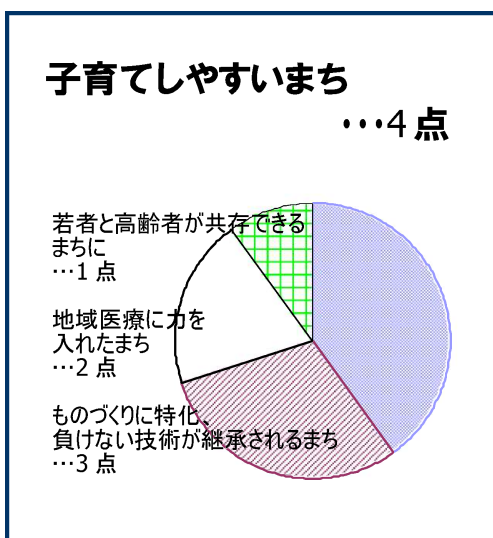
子どもの教育資金では、乳幼児期ではなく義務教育より後に多く掛かる。このため、勉強したい子どもには、家庭環境に関わらず奨学金制度などで資金を賄う対策が必要である。親の収入で子どもの将来が変わるなんておかしい。特に子どもの貧困対策を重要視してほしい。

もし、子どもたちの環境が改善され、子育ての地域連携や情報交流などの NPO の使命が達成されたとしたら、私たちの活動は必要がなくなるはず。そのときまで活動を続けていきたい。



[原田博子さん]

子育て関連団体、個人の相互の情報交流のサポート。団体・行政・企業・学校などの連携を推進。



【浜松市への期待度グラフ】

●育てたい、考える力を

最近では、子育て家庭の防災対策の講演やワークショップの依頼が県内外からある。防災訓練は、地域単位で行うことが一般的である。しかし、子育て中の家庭では、どうやって子どもたちを守るか、対応の優先順位が何かからかなど、防災対策の課題は多い。とにかく、防災と聞くと話が硬くなりがちなので、楽しみながら理解を深めていくことが大切である。私たちが子育て講座や防災ワークショップなどを運営する上で一貫しているのは、すべてしてあげないこと。行政も手を出し過ぎてはいけない。せつかくの考える力が育たなくなってしまうから。

●地域の子どもたちの故郷を守る

地域の子どもたちが「故郷レス」にならないように。北遠地域の町がゴーストタウンにならないように活動している。バランスの取れた住みよい地域に緑豊かな山々は必要。少しでも長持ちさせたい。そんな思いでNPOの活動を続けている。

私たちのNPOでは、子育てや高齢者の支援、耕作放棄地や空き家対策などの地域課題に、分野を問わず取り組んでいる。利用者には対価をいただき、会員には報酬を支給する。事業を長く続けていくために、ボランティアではなくソーシャルビジネスとしての仕組みが必要だと考える。



[平澤文江さん]
農林業やITの知識を持つ仲間とともに、特産品のネット販売など、水窪の魅力を都市部に売り込んでいる。

●「生きる知恵」が途絶えないように

まちなかの子どもたちを対象に講座を開いた際、火を見たことのない子、マッチを使えない子が大量に驚いた。オール電化の家に住んでいて、日常生活で火を見ないようだ。生活の基本を知らない子どもたちが30年後の社会を動かすことに、不安を感じる。

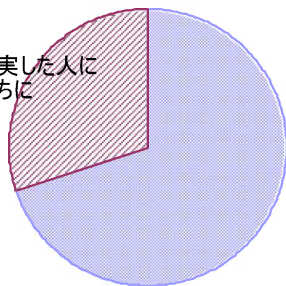
水窪では、子どもの数が減少し、1学年10人前後になってしまった。子や孫と同居している高齢者は、一握りの幸運な人だけ。「自分の知識や経験を次の世代に伝える」という役割を失ってしまった人が多い。そんな高齢者と子どもたちの出会いの場をつくりたい。火を見たことのないまちの子に、山のおじいちゃん、おばあちゃんが火の使い方を教える。教えてくれた高齢者には、きちんと報酬を支払う。浜松市全体で、生きる知恵を継承していかなければいけないと考える。

特産品である枳の実がどの山にあるかといった知識や、枳もちをつくる加工技術は、水窪でも70歳以下の人ほとんど知らない。今、高齢者の持つ知識や経験を教わらなければ、文化が途絶えてしまうという危機感を感じている。「田舎に住みたい」「自然に囲まれた環境で働きたい」と考える都会の人は多く、実際に移住したり、会社を移転したりするケースもある。彼らが、山や川、特産品を守る担い手になってくれることに期待している。

**新しい時代の理想の
ワーク・ライフ・バランスが
実現できるまちに！**

…7点

福祉が充実した人に
やさしいまちに
…3点



【浜松市への期待度グラフ】

●理想のワーク・ライフ・バランスを実現！

行政には、高齢者や子どもなど、弱い立場の人を助けることに力を入れてほしい。

最近、人の生き方・働き方の意識が変化していると感じる。浜松市は、働く場所と住環境が整っていて、休日に家族で遊びに行ける山や海、公園がある。理想のワーク・ライフ・バランスを実現できる要素がそろった理想的な地域だ。この恵まれた環境を利用し、みんなが人間らしく生きていける社会になってほしい。

ほうだい ひろあき
蓬台 浩明さん

ドロフィーズ 代表取締役社長

● **都会の素敵なライフスタイルを楽しむ為の生活をしたい大人（退職後）が浜松を選びたくなる生活を発信する街に！**

世界を見れば、「マテリアル」から「IT、金融」、そして今後は「人の心」がグローバル時代における成長のキーワードとなる。超高齢社会となった日本においては、社会の中心となる高齢者の心をいかにつかむかが一つの鍵となるのではないかと。とりわけ、都市部に居住する団塊世代など、多様な価値観と高度の文化を持ち、都会のお洒落な生活を知る高齢者は、これからの日本、そして世界をリードする価値を生み出す存在である。

浜松は温暖な気候、医療の充実や交通の要衝といった魅力を既に持っているため、更にインパクトある移住支援制度を設けることで、退職金や年金等と合わせ、十分に豊かな生活が送れるような魅力的なライフスタイルを提示し、様々な人材が全国、ひいては全世界から集まるようなまちづくりを目指してはどうか。

● **「カッコよくてオシャレ」なまち・浜松をまるごとブランディング！**

浜松は、自然環境に恵まれ、音楽文化も根付くなど多くの魅力に溢れている。しかし、裏を返せば、魅力がバラバラなため、まちのイメージがぼやけているとも言える。ボストンやロサンゼルスなどは、都市自体に憧れるブランドイメージがあり、世界中から人を集めている。

30年先を見据えた、行政のマスタープランをつくるのであれば、ジャズやバイクなど、浜松の持つ多くの魅力が、「カッコいい」というキーワードで結ばれ、世界の人々を魅了し続けられるようなまちであってほしい。

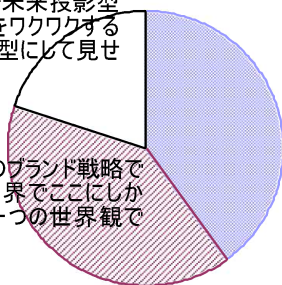
各分野の第1線で活躍する人々がわくわくするような「とんがった」メッセージを与えられるセンスを持つ、民間のブランド戦略家をまとめ役に起用してはどうか。



エコ、アートなど、一貫した浜松イメージをつくり、世界から人を集める…4点

「ものづくり」を未来投影型で人の生活をワクワクするスタイル提案型に見せていく
…2点

世界視点でのブランド戦略で発信をし、世界でここにしかない価値を一つの世界観でまとめる
…4点



【浜松市への期待度グラフ】

● **世界最高のホスピタリティを浜松から！**

マテリアル、ITと数10年単位で世界の価値観が動いてきた。

そして、これからの30年は、ロボットで代用できない「もてなし」の心の時代になるだろう。

今、日本流のサービスやもてなしが、世界で評価されつつあるが、よそ者であっても頑張る人を応援するというオープンな浜松の気質は、新たな発展のポテンシャルとなるものではないか。

浜松の個性を一つにして、市民全体でもてなしのまちづくりを進め、外部からの様々な人を集める原動力としてはどうか。

ほりうち ひでのり
堀内 秀哲さん

一級建築士／中野町を考える会事務局長
東区協議会委員

●チャレンジ精神と起業家気質が最大の強み

浜松市の最大の強みは「ものづくり」の盛んな風土、また、その背景にあるチャレンジ精神と起業家気質である。結果、これまで製造業や光産業をはじめとした世界的企業がたくさん輩出した。静岡県建築士会に所属し、県内都市の人と関わることがあるが、総じて西部地区は新たな取り組みに前向きである。静岡県は、文化財保護に建築士が携わる「文化財建造物監理士制度」を3年前に設けたが、第一期の登録者は浜松市の建築士が多い。浜松市民が何事にも積極的に向き合う良い例である。



【堀内秀哲さん】
建築士としてのご自身の能力を活かしながら地元中野町の地域づくりにも積極的に取り組んでいる。

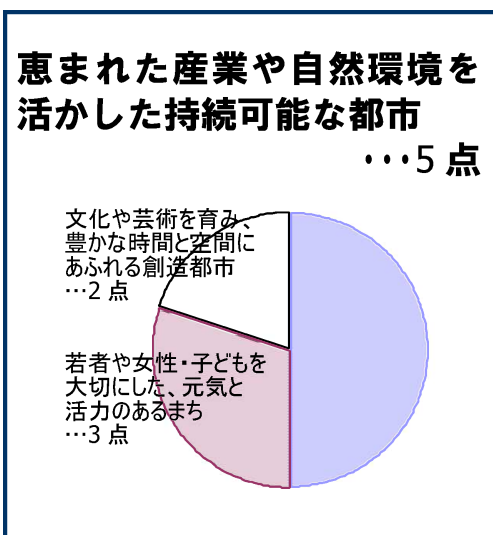
●古いものと新しいものが共存する社会に

創造都市を目指す浜松市だが、文化芸術面を考えたとき、伝統文化や文化財の保護への関心はまだ低い。明治から昭和初期の建造物は、デザインや文化財としての価値が高いだけでなく、産業や暮らしの近代化を支え現代社会の礎を築いてきた。歴史的な建造物は新しいまちづくりにも活用できる。中野町では、およそ100年前に木材交易で栄えた歴史の象徴として「伊豆石の蔵」をまちづくりに活かす取り組みをしている。

スクラップ&ビルドの消費型社会から脱し、歴史や文化に価値を見出し、古いものと新しいものが共存する、成熟したサステナブルな社会になって欲しい。

●まちがゆっくりと代謝しながら継続して行ってほしい

今後の超高齢社会を考えたとき、高齢者施策は当然必要だ。しかし同時に若者に対する施策も講じなければならない。中野町を考える会では学校と協力し、授業の中で子どもたちが地域の良さを知り、触れる取り組みをしている。



【浜松市への期待度グラフ】

自分の住むまちに愛着と誇りを持つことが、持続可能なまちを創る第一歩だ。時代によってまちの姿は変わっていく。しかし、先人の築いた過去の遺産を受け継ぎ、次世代へ伝え、地域の文化や風土を守っていく必要がある。まちがゆっくりと代謝しながら、継続して行ってほしい。

政令指定都市に移行する際の「環境と共生するクラスター型都市」のスローガンはとても魅力的であった。時代の変化により方向転換が必要だとしても、コンパクトでありながら、それぞれの地域特性を活かしたまちづくりを目指してほしい。

まつした かつみ
松下 克己さん

遠州の地域を考える情報誌「エコノワ」
有限会社キーウエストクリエイティブ

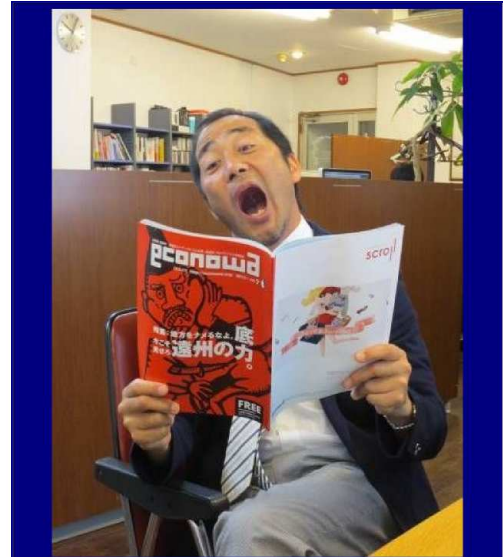
●デザイン業界の存在感を高めたい

浜松は他都市と比べて、経済は豊かで、雇用も豊富だが、大企業が牽引している部分が多い。どうしてもそこに目が行きがちであるが、大企業を支え、高度な技術を持つ中小企業もたくさんあるのも事実である。こうした技術を世の伝えるためのツールこそが「デザイン」ではないだろうか。デザインは情報発信のチカラを持っている。私たち様なデザイン業界が直接的に産業界と結びつくことによって出来る可能性はまだあると考える。ただ、浜松ではその結びつきが弱いのが残念。私たちの努力も足りないが、デザインという業種が認知されていないと痛感している。

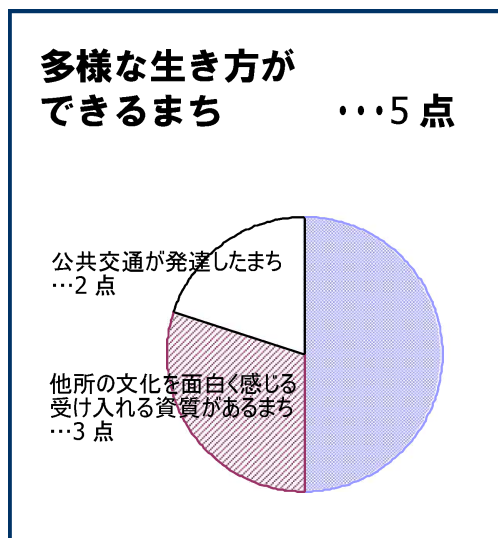
浜松は、農村、漁村、山村、そして、都市部において様々な人間のシーンがある。浜松の様々な情報が市民に伝われば、自分が住んでいるまちの姿を再認識し、新しい行動への喚起となる。浜松のシビックプライドを醸成できる。デザインのまちづくりに対する役割は大きい。その役割をもって積極的に社会参加する事によってデザインの存在感を高めることができると考える。

●『どうせ頼むなら良い会社』

顧客が業者を選ぶに当たって、価格を重視することはしかたないことであるが、これに加えて、企業の社会貢献度についても選ぶ基準にしたい。そこで、考案中なのが「どうせ頼むなら良い会社」紹介。地域に根付く企業を紹介する冊子として、価格だけでなく、CSR や地域貢献の取り組みを紹介し、企業の価値を高めたい。私たち市民が良識ある企業のサービスや商品を選択することにより、CSR や地域貢献が企業戦略に必要不可欠なものになるようにしたい。そうすれば、そんな企業がいっぱいある「浜松」は魅力的な地域になると思う。



【松下克己さん】
バラエティ豊かな浜松。地域密着の情報発信で、デザイン業界の存在感は高まる。



【浜松市への期待度グラフ】

●バラエティ豊かな生き方ができるまち

浜松の一番のポテンシャルは「多様性」である。生き方や経済活動、フィールドの多様性をお互いに認め合うことが必要で、色々な価値観があつてこそ、まちは面白く、魅力的になる。人は刺激し合って豊かな人生を送れる。生き方の多様性が地域の特色を生むものとする。

こうした情報を分かりやすく伝えることは、デザインが持つ役割のはず。私たちはもっと「まち」に関わってかなければいけないと思う。

行政に対しては、情報発信の重要性を認め、施策の基本構想の段階から情報発信の計画も組み入れて考えてほしい。

まつしま たっや
松島 達也さん

公認会計士

●特徴や意図の見える中心市街地づくりを！

全国的に見て浜松は、都市規模の割に、数多くの企業が立地し、一定規模の監査法人が立地できる産業力を持っている。しかしながら、中心市街地の賑いは他都市と比べても弱いと感じている。人が集まることで魅力が集まり、まちは活性化する。広大な市域や車社会といった浜松市の特徴を考えれば、まずは使い勝手の良い駐車場を整備し、静岡市のように歩いて楽しめるまちを目指すべきである。欧米の都市事例を参考に、イベントなどに留まらず公共施設の駐車場を無料化し、中心市街地とへ歩いていける導線を確保してはどうか。



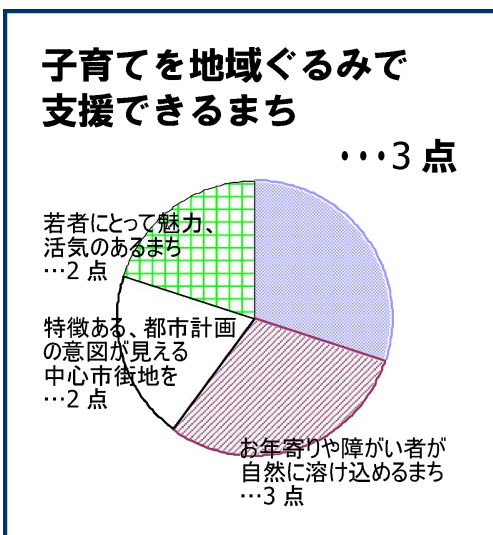
●市民の対話による行政を！

公共部門に対する監査のニーズが高まっている。民間とはルールが違うものの、一般市民として無駄を無くし、不公平感を払拭することで納得する行政を進めてほしい。

市政を進める上で、多くの審議会を置いているが、そこで言われているからそのまま従うのではなく、プロフェッショナルとして議論すべきことはしっかり議論し、相互理解の上でより良い行政を進めていく姿勢が必要である。

●ノーマライゼーションの実現を！

現在の社会福祉施設は、まちから離れたところに数多く立地しており、地域社会との交流が十分でないと感じる。核家族化の進行などにより、子どもたちが高齢者や障がい者と接する機会が昔以上に少なくなってきたおり、どう接して良いか戸惑っている様子を目にすることがある。障がい者の雇用促進など、ノーマライゼーションに向けた政策の実現は、徐々に進められているが、だれもが地域社会と関わり合いを持ち、安心して暮らしていけるまちづくりを、あらゆる分野で進めてほしい。



【浜松市への期待度グラフ】

●地域資源を活用した子育て支援を！

将来を見据えれば、これまでのように市民ニーズに応じて行政サービスを拡大する時代ではない。そもそも、地域活動は住民自らが協力し合って進めていくものであり、まずは住民が地域に目を向け、関心と参加意識を高めるような施策が必要である。とりわけ、子育て支援については、無関心を装うことではなく、大人が声をかけ、目をかけ、地域全体で子育てしていくことが必要と考える。厳しい経済状況のなか、親が安心して仕事と子育てを両立できるには、元気で優秀な地域の団塊の世代を活用していくことが大事である。

まつしま よしとも
松島 良友さん

浜松経済クラブ 理事長

株式会社西部サービス 取締役



[松島良友さん]
起業しやすい環境を整え、起業を志す方が集まる浜松市になってほしいと語る

●住まいを重視するまち浜松

個人的な感覚だが、浜松市民は衣食住のうち、住まいへのこだわりが強いように感じる。市域に広い平野部があり、住宅用地に困らないことも要因であると考えている。

住まいにお金をかける割合が高いということは、仕事柄ありがたいことではあるが、衣服や食事にお金をかける割合の低さが、まちなかの活性化を阻んでいる一因ではないかと分析している。

●新産業が生まれ、起業家が集う都市に！

雇用の場の確保は、市民が生活の基盤を築く際に最も重要な点である。既存産業にいつまでも依存するだけではなく、この地域をリードするような新たな産業が生まれる都市になってほしい。光技術と医療の融合や、新農業分野などに新たな可能性を感じる。また、浜松市内外から起業をしたい人を集めるため、税制優遇や規制緩和による参入障壁の軽減を進め、アメリカのシリコンバレーのように起業家のメッカになってほしい。

●いつまでも住みやすい街であってほしい

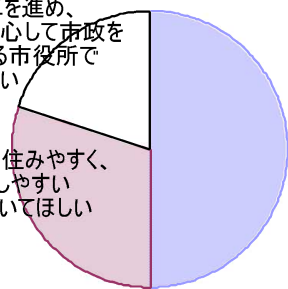
浜松経済クラブには、市外からの通勤者もいるが、そうした方は口を揃えて、浜松は本当に住みやすく、子育てもしやすい土地であると言う。現在は行政の努力が結実している成果であると思うが、これから税収が減っていく中、現在の市民満足度をいつまで維持できるかが重要である。企業でも、業績が振るわない場合の対処法は顧客の新規開拓（＝収入増）とコスト削減の2つであり、行政でも基本的には同じであるとする。限られた財源の選択と集中、外郭団体の見直し、民間活力の活用を進め、いつまでも住みやすい街であってほしい。

新産業創出と起業家への支援が充実した浜松に

…5点

行政改革を進め、市民が安心して市政を任せられる市役所であってほしい
…2点

いつまでも住みやすく、子育てがしやすい浜松市でいてほしい
…3点



【浜松市への期待度グラフ】

●日本版リーマンショックを起こさない

業界（住宅設備工事）としては、住宅の新築件数が減っていくが、リフォームの需要は増えていくと考えており、将来見通しは悲観していない。

これまでは1つの家の中でおじいちゃんおばあちゃんの年金があり、お父さんの給料があり、お母さんのパート代がありと、世帯内で一定の収入があったが、これからは、世帯人員の減少が進み、世帯内の総収入が減ってくる。そうすると、住宅の修繕費用が賄えなくなり、住宅を手放さざるを得ない世帯が出てくる危険性がある。サブプライムローン問題に起因するリーマンショックと同じような状態が発生する危険性を防止する施策が必要ではないか。

まつもと たけお
松本 健男さん

エコアクション 21 審査人



[松本健男さん]
これまで培ってきた知識や経験は、今後産業を発展させていく上で、役に立つ。元気な高齢者には少しでも社会に貢献するべきと語る。

●高齢者が社会に貢献できるまちづくり

私と同年代の退職した人の中で何もやっていない人がたくさんいる。それは、まだ働けるのに、また、働きたいのに、現状働ける場所がないからだ。今日、高齢者は面倒を見られるばかりの立場ではない。まだまだ元気な人はいる。年齢に関わらず人は何かの役に立っていることが生きがいであると思う。働く人と扶養される人の関係ではなく、市民が可能な範囲で、気軽に社会貢献でき、わずかながらでも一定の報酬が得られるシステムがあれば良いと思う。ある企業に定年退職のない会社ある。そこではこれまでの知識や経験を活かして、60代の社員が最も活躍しているという。我々世代には、勤労とは報酬を得ることなので、無報酬のボランティアではなく、企業など働ける場所があれば、もう一度社会に貢献しようとする、高齢者が増えるのではないか。

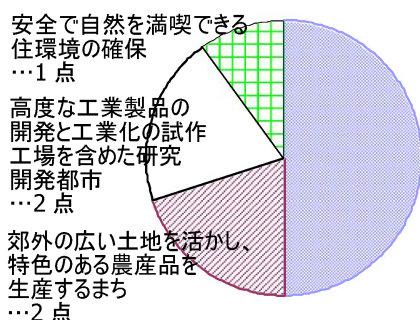
●知識や技術を次世代に

退職した高齢者の中には長年培ってきた高い専門知識や技術を持った人が大勢いる。そんな人材を放っておくのはもったいない。そのような高齢者を集めて、企業の技術力向上等の直接協力、指導することができるような組織をつくってみてはどうだろうか。技術支援を求めている企業に対してハローワークのようなシステムで技術者を派遣する。85歳くらいまでなら、頭だけなら働ける。今までにユニークで様々な産業を創出してきた浜松市の気質に合っていると考える。

●省資源・省エネルギーの普及を

私はこれまでの知識や経験を活かして、エコアクション 21 の活動をしている。活動を通して、企業にとって省資源・省エネルギー化を推進させることは、企業の利益を生み、しかもそれが地球環境の保護に役立つことを認識してほしい。高度経済成長期に、公害防止機器の設置が義務付けられたが、企業は利益を生まないものへの投資に強く反対した。しかし、公害の防止と企業の発展は両立でき、公害の無い環境を取り戻すとともに、世界有数の工業国に発展した。その上に公害防止設備産業を生み出した。日本にはそのような力がある。かつて公害防止に向けたようなパワーを、省資源・省エネルギーに向けて、企業が成長を続けてほしい。私自身も企業活動で得た知識を少しでも社会役に立ててもらえるよう努力したい。

高齢者が社会に貢献し、存在価値を認識し、生きがいを持てるまち ……5点



【浜松市への期待度グラフ】

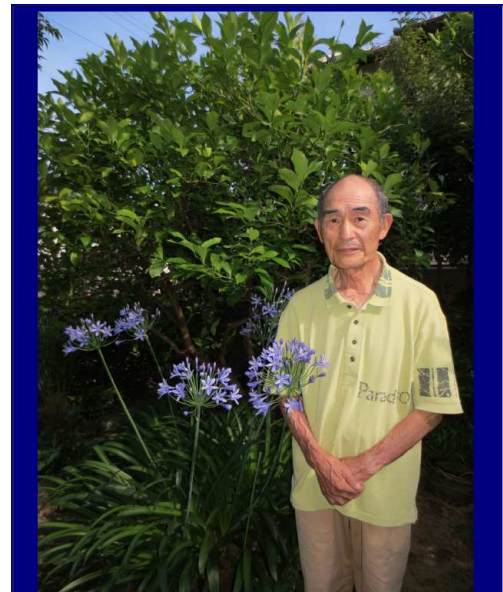
みなみはた なおゆき
南畑 直由さん

グランドゴルフ グラスホッパーズ代表
バウンドテニス積志同好会代表

●浜松を風格あるまちに！

約 50 年前、転勤で初めて浜松駅に降り立ったとき、街の顔としての駅前が寂しかったのを覚えている。伝統あるまちなのだから、印象的で風格あるまちづくりを進めてほしい。仙台市などは、大樹の街路樹が整備されており、威容を誇っている。

浜松国際ピアノコンクールを継続するなど、浜松が誇れる文化を大事にしていくべき。



【南畑直由さん】
健康のために、グランドゴルフを続けている。

●住民主導で美しい街並みづくりを！

海外の人から、沿道の様々な色やデザインの看板が並んでいることについて、異様な光景だと言われたことがある。言われて気付いたが、確かに思い思いの看板が、道路標識のように至るところに設置され、美化を損ねていることを痛感した。

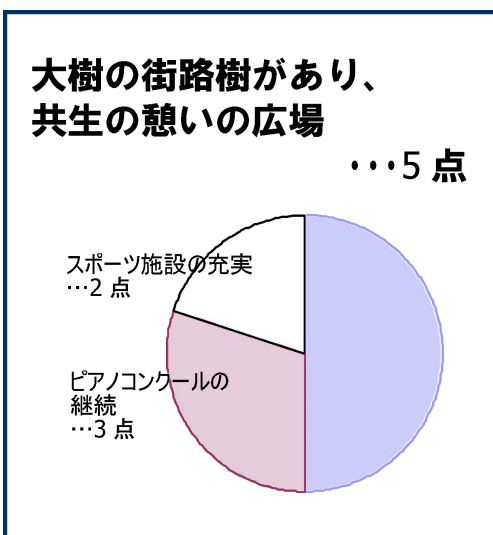
自分の住む町も、屋根や壁が不統一の色となっている。ぜひ、住民同士が話し合い、規制なども活用して、電線類の地中化も含めた、統一感のある落ち着いた美しいまち並みづくりを進めてほしい。

住民は、だれもが自分たちの住む町を大事に考え、地域の美化や発展を望んでいることから、行政は、予算を使って自らやるのではなく、住民主導で取り組むための手伝いをしてほしい。

●人々が集う場づくりを！

ニュージーランドでは、広場に芝生を敷き、地域の人々が気軽に集まる広場をあちらこちらに設けている。芝生を敷くことにより、人が自然に集まり、そこから交流が生まれると聞く。

小学校のグラウンドや公園なども芝生を敷くことによって、地域住民が集まり、憩い、交流する場になるのではないかな。



【浜松市への期待度グラフ】

●各小中学校を地域スポーツの場に！

現在、グランドゴルフやバウンドテニスなどにより、地域の高齢者がお互いにスポーツを通じて健康づくりと交流の場づくりを進めている。

住民活動は小学校や中学校単位で行うことが多く、活動場所が不足していると感じたことはない。ただ、小中学校施設は、学校教育を基準に建設されていることから、今後改修等を行うときは、学校教育だけでなく、地域スポーツ、生涯スポーツの観点から、地域住民の声を聞いてほしい。

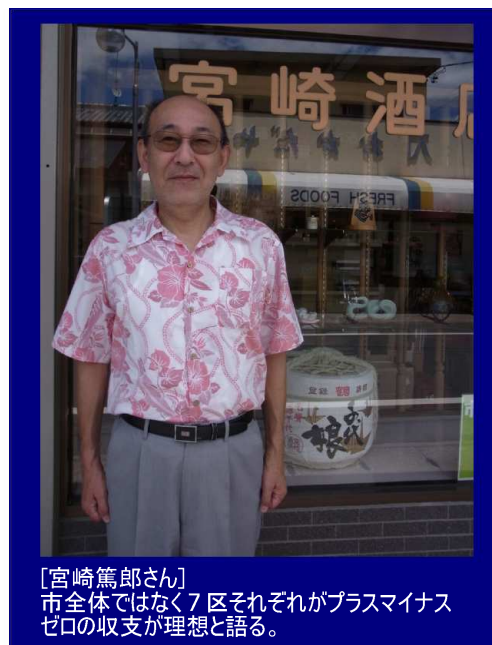
●まずは逃げることを考える！

逃げることを考える。

防災においては、これが1番重要。逃げて、自分や家族の身を守る。それができなければ、他人を救助することもできない。

高齢者などの災害弱者の救出をどうするかが課題であるが、自治会等で保有する名簿は個人情報が含まれており、共有することができない。

個人情報保護の重要性は理解できるが、誰が災害弱者かを地域が把握し、災害弱者本人が救助を必要としているのかの意思表示を周りに知らせるため方法を考えなければならない。



[宮崎篤郎さん]
市全体ではなく7区それぞれがプラスマイナスゼロの収支が理想と語る。

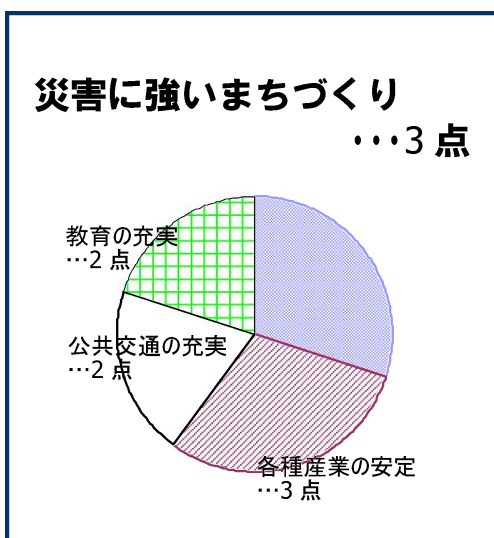
●合併に対する様々な思いは、ゼロベースでスタートを…

そろそろあきらめても良いのでは…。

良くも悪くも、合併前の役場は小回りが利いて便利だった。また、地域住民に対する財政的な援助も行っていた。これを現在の状況と比較して、「合併前の方が良かった。」と言う人たちがいるが、合併することを選んだのは我々だし、合併から8年も経つし、そろそろ気持ちを切り換えて、ゼロベースで考えていかなければならない。

防災についても、役場頼みという考え方が染み付いているため、地域の防災に対する意識は低い。防災に対する備えは自己責任であると意識を改めて取り組んでいくことが重要であると考える。

その一方で、地域の消防団に対する意識は高く、「やりたい」という人が多い。20代～50代と幅広い年齢層の方が所属し、団員が不足するという状況は起こらない。



【浜松市への期待度グラフ】

●暮らしやすさの追求を！

今後の浜松に期待するのは、「暮らしやすさ」。

市民一人ひとりが自分勝手なわがまを言わず、当たり前前を当たり前前のようにやるような地域になってほしい。これができれば「自助・共助」が自然に成り立っていく。

また、市全体ではなく、7区それぞれが収支をプラスマイナスゼロとし、自立した運営を行えるようになってほしい。地域の収入を増やすため、地域特性を活かした産業の育成などについて、行政がしっかり導いていけるのが鍵となる。

みやた ひろし
宮田 洋さん

遠州鉄道株式会社 経営企画部長



「宮田洋さん」
浜松市民の郷土愛に支えられながら、これまで以上に地域になくてはならない企業になっていきたいと語る。

●郷土愛に支えられて

浜松市民は郷土愛が強いので、全国規模や外資の店舗が参入しても、地元の企業は変わらず利用してもらえる。また、浜松市民同士は初対面で出身校を聞く方が多く、同じ高校の出身というだけで急に打ち解けたりということもあり、そうした面からも、地元意識の強さが伺える。

●お洒落して出掛けたいまちなかに

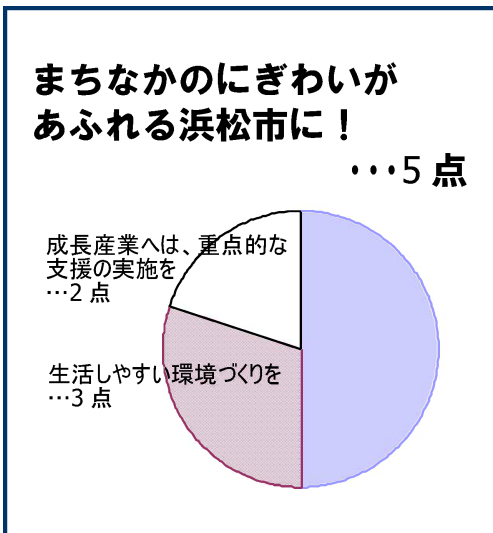
浜松市はものづくりのまちとして発展を続けてきており、働く場所が市内にある。当たり前なことではあるが、これはこの地に住むという選択をする上で重要なことである。

しかし、事業所は郊外に多く点在しているため、自宅から仕事着のまま車に乗ってそのまま職場に向かうということが出来てしまう。まちなかに職場がある商業都市とは違い、仕事帰りにまちなかに寄るとい習慣がない。まちなかのにぎわいに欠ける要因はそこにある。まちなかを活性化させるためには、自宅と職場を車で往復している方が、お洒落して出掛けたいと思えるようなまちなかにしていく必要があるということである。

●将来を見据えたまちづくりを

全国でも有数の施設、道路を管理する浜松市にとって、人口が減少し、高齢者の割合が増えていく中で、まちづくりをどうしていくかというのは非常に重要な問題である。コンパクトシティという発想も良い。また、自分の住んでいる土地には愛着を持っている方もいるので、インターネット環境を整備し、買い物の利便性を高める方策もある。

税金が減少していく中、全体的な経費の削減を進めるだけでなく、観光業のようなこれから発展が見込まれる分野については、育成のために支援をしていくことも必要である。



【浜松市への期待度グラフ】

●便利なまちへのお手伝い

自動車を持たない世帯も増えており、鉄道沿線に住みたいという需要は、ますます高まっていると感じる。鉄道沿線の宅地開発について、規制緩和が進んでほしいと考える。

一方で、浜松の農産物はおいしいという話をよく聞き、私自身もそう感じる。開発すべきところは開発し、農業を推進するところは営農しやすい環境を整えて、すばらしい農産物も生みつけてほしい。

様々なライフスタイルの方が生活する中、地域の方の生活に深く関連のある企業であるので、これからも地域の方に愛され、なくてはならない企業でありたい。

もりした あきこ
森下 亜希子さん

NPO 法人はるの山の楽校職員

●自然に関心を持ったわけ

名古屋市に生まれ、自然に触れる機会が少ない環境で育った。三重県の片田舎で病院に勤めていた時に地震が起こり、もし電気・ガス・水道が止まったら生活していけないと不安を感じた。この時、年配の患者さんに「畑に野菜があるし、水が湧いているところもある。火を焚けば問題ない。」と諭され、いかに、整備されたライフラインに頼って生活し、自然を利用するべを知らないかに気づかされた。

その頃、ドイツの環境都市・フライブルクを訪ねた。寒さを凌ぐためにガラスを三重にした省エネ住宅、まちの中にある小水力発電施設など、電力を自給自足するシステムが整っているのを見て、今の日本の暮らしは自然から離れすぎていると感じた。自然のことを知りたいという思いが強くなり、岐阜県立森林アカデミーに入学。人間も含めて、生きものは、たくさんのつながりの中で生きていることを学んだ。



【森下亜希子さん】
春野へ移住してきた人たちを中心に、毎月、自立できる地域づくりについて話し合う。

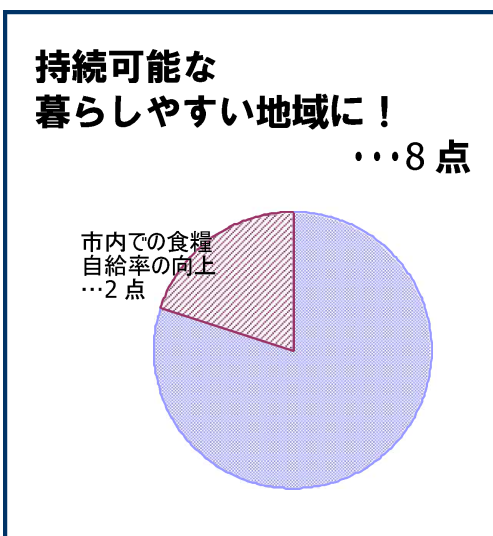
●春野に暮らしはじめて

ふじのくに暮らし推進隊（地域おこし協力隊）として春野にやって来て、定住することになった。春野は、集落が分散しているのが特徴。春野全体でまちおこしをするのは難しいが、集落ごとに助け合う自治意識が高いという長所もある。

集落をある程度まとめるのは経済的かもしれないが、環境を守るためには、山を管理できる場所に人が住むことが必要。浜松は市域全体が天竜川水系であり、山間部の環境を守ることは、まちなかに住む人の役にも立つ。

●自給自足できる地域を目指したい

春野で、春野の野菜を買える場所がないことに驚いた。地元のもので地元で売れる場所をつくり、地域の中でモノが循環するようになるべきである。



【浜松市への期待度グラフ】

少ない品目を大量生産して都市部に売り出す農業は、無駄が多い。春野は、地域内自給自足のモデルとなることができる地域。農産物の流通やエネルギー自給を進め、自立した地域になればと考える。

●生き物として健やかに暮らせる社会に

人が生きていくために本当に必要なのは、お金ではない。中山間地域には、食べ物、環境、人間関係など、人が生きものとして健やかに暮らすための土壌がある。これを、どうやって残していけるかが今後の課題である。都市部においても、もう少し自然に近づいた暮らしができるようになると良い。

もりもと ゆうき
森本 悠己さん

有限会社アップハート 店舗支援室長

●地域との繋がりを大事にする浜松

浜松は中心部に賑わいがある一方、自然が身近にあり、市民が地域との繋がりを大事にしてとても住みやすい。新入社員は浜松へのUターン者もあり、人と関わることを好きな社員が多い。また、勤務時間も長く、大変な職場だが、社員はガッツがあり、それも浜松市民の特徴ではないかと感じる。お客さんも年齢層が広く、常連客や、さらにその人達からの紹介でファンになっていただく人も目立つ。これも地域との繋がりを大事にする浜松の特徴である。



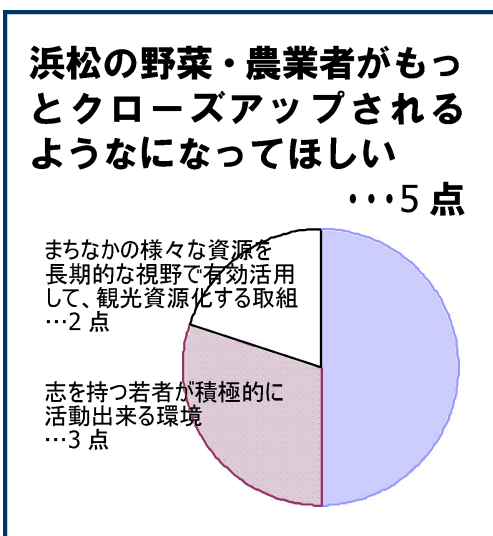
【森本悠己さん】
地元野菜の素晴らしさを提供者である飲食店が
もっと伝えていきたいと語る森本さん

●自分の大切な人をもてなすには？

無農薬野菜にこだわることとなったきっかけは、「自分の大切な人をもてなすにはおいしくで安全なものを食べてもらいたい」という思いが出発点になっている。付き合いのある地元農家の無農薬野菜を、美しい見せ方・美味しい食べ方で提供し、お客さんが喜んでくれることが一番のやりがいである。浜松の野菜は1年を通して手に入るものが多くて品質も非常に良い。うなぎや餃子と同じように、浜松の美味しい野菜も地元の食文化として定着してほしいし、全国にも広まってほしい。また、店としてそのお手伝いができれば良いと考えている。

●飲食店の取り組みでまちなかの活性化を！

浜松のまちなかは平日と休日、昼と夜の人手の差が激しい。夜に多くの人が集まるのは、様々な魅力ある飲食店が街中に溢れているからこそである。現在も、まちなかの飲食店が合同で開催しているイベントがあるが、行政の手も借りつつ食をテーマにしたさらに大規模なイベントができれば、更にたくさんの方が集まると考える。そうした人々を十分におもてなしできる店舗はそろっているし、イベントをきっかけに気に入った店を見つけてもらえれば、リピーターも増え、まちなかの活性化が進む。



【浜松市への期待度グラフ】

●まちなかの古い建物を活かして！

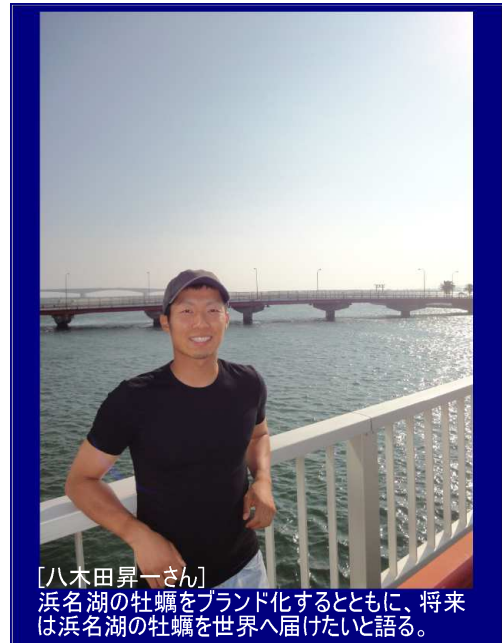
古いビルをリノベーションした利活用などが最近まちなかで行われているが、こういった志を持つ若者が集まる風潮は新しい文化を生むと思う。浜松に住む人は地元が好き人が多いのだから、そのような人たちがもっと輝ける環境づくりが必要である。

さらに、まちなかの古い建物には、趣のあるものも多く、長期的な視点で、それらを将来の観光資源に活用していくための準備もしていければ良いのではないかな。

●日本の牡蠣に世界が注目！

海外に語学留学をしていた経験があるが、海外の友人に自分の両親が牡蠣養殖をやっていることを伝えたら「日本の牡蠣はすごい！」と話していた。

日本の牡蠣が世界で認められていたことを知って、非常に嬉しかったことが、会社員を辞め、家業の牡蠣養殖を始めたきっかけである。自分がこの浜名湖から世界に通じる食材をつくりたいという気持ちがとても強くなった。



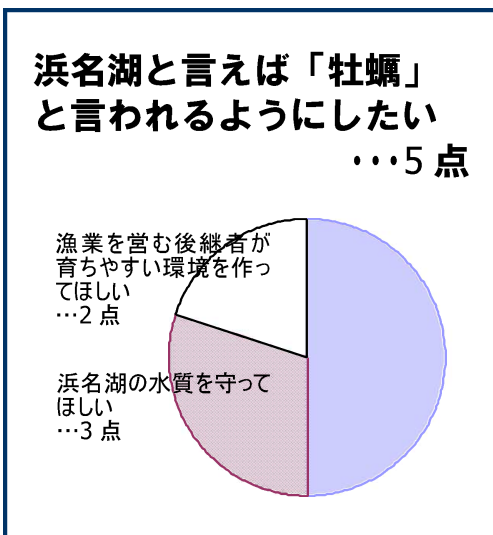
【八木田昇一さん】
 浜名湖の牡蠣をブランド化するとともに、将来は浜名湖の牡蠣を世界へ届けたいと語る。

●「牡蠣と言ったら浜松！」を目指して

私はブランド化志向が強く、浜名湖の牡蠣を今以上にブランド化したいと思っている。鳥羽や広島の牡蠣と比べても、浜松の牡蠣は身がぎっしり詰っていて肉厚で美味しいと自信を持っている。11月から3月の期間限定の食材ではあるが、浜松市内はもちろん高速道路のサービスエリアなどでも当たり前のように「ご当地グルメ」として認知され、旅行者が「浜名湖に来たら牡蠣を食べて帰りたい」と思ってもらえるようにしたい。

●浜名湖の水質を守りたい

浜名湖では今年、アサリの不漁が続いており、潮干狩りも中止になってしまった。浜名湖で牡蠣が成長するのは、気候や潮の温度の影響もあるが、プランクトンが重要。このため、プランクトンが豊富なところへ浜名湖中を移動させながら手塩にかけて育てている。浜名湖の水質が悪くなれば、牡蠣だけでなく漁業全体に影響が出る恐れがある。今の浜名湖の牡蠣の品質は充分だが、先輩からは「昔は山から直接水が届いていて、牡蠣がもっと大きくて美味しかった」とも聞く。自分としても浜名湖の水質には常に気を配っているが、行政にも浜名湖の水環境の保全に気を配ってほしい。



【浜松市への期待度グラフ】

●後継者が育つ環境を

浜名湖で牡蠣養殖を営む事業者のうち、同世代（20歳代）は私を含めても5人程度しかいない。代々家業として成り立っており、親子2人で営まなくては作業が困難である。また、技術の伝承にも時間はかかり、その上、体力のいる仕事なので、後継者が早く出てこなければ円滑な技術の継承が困難になってしまう。

浜名湖は上質な牡蠣が育つ恵まれた環境であり、シーズンにはテレビの取材も入るため、注目度も高い。高付加価値化を進めるためにも、後継者が育つ環境づくりが大切である。

やました

山下 いづみさん

地域包括支援センター和合 所長

●地域の高齢者福祉の先導者として

高齢者の権利擁護や様々な地域課題に対応するために制度化された地域包括支援センター。平成18年度に出来た当初は、センターでどのような活動ができるか、手探りの面があり苦労したが、現在は地域にその役割が浸透してきたように思う。行政ではすぐに対応することができなかつた民生委員からの相談ケースを、センターが関与し課題解決のプロセスを示すことができたときは、「地域包括支援センターあつての民生委員だ。」と言われたこともあり、非常にやりがいを感じた。

私たちとしても、民生委員の皆さんが、地域のアンテナ役として動いていただけることで、センターの円滑な業務遂行に大変助かっており、感謝している。

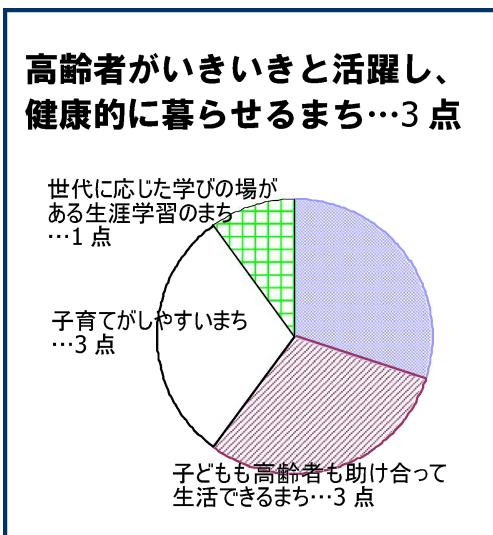
●他都市よりも医療資源が充実！

浜松は、「やらまいか」精神があるように、まず取り組んでみる気概があるまちと感じる。浜松まつりや伝統行事を通じた、地域のつながりも強い。また、市内に多数の総合病院があるなど、医療施設も充実しており、それに合わせて、介護施設や事業所も数多く設置されている。

気候も良く、子育てもしやすく、通勤族の中には、浜松市を終の棲家を選ぶ人も多いのではないかな。

●元気な高齢者が活躍できる社会へ

今後、高齢者の人口が増え、支える若い世代は減少していく時代になる。自分でできることを、仲間と分け合い、地域や人とのつながりを大切にしながら、いつまでも世代に合った役割を担う社会を望む。



【浜松市への期待度グラフ】



【山下いづみさん】
総合病院の内科、外科での経験や、訪問看護ステーションなどの勤務を経て現職。今までの経験を後進へ伝えることも大切な役割と語る。

やました まさよし
山下 正義さん

静西興業株式会社 代表取締役

●オートバイのメッカ、浜松

浜松はものづくりのまちとして発展してきた。とりわけオートバイは、私自身メーカーで開発に携わっていたため思い入れが強い。浜松は、世界に誇るオートバイメーカーが多数誕生した都市であり、世界中の人が「浜松」の名前は知らなくても、ホンダ、ヤマハ、スズキの名前は知っている。これだけの強みを持った都市は他にはほとんどない。産業観光を中心にうまい仕掛けができれば、浜松は世界中から観光客を呼び込めるまちになる。



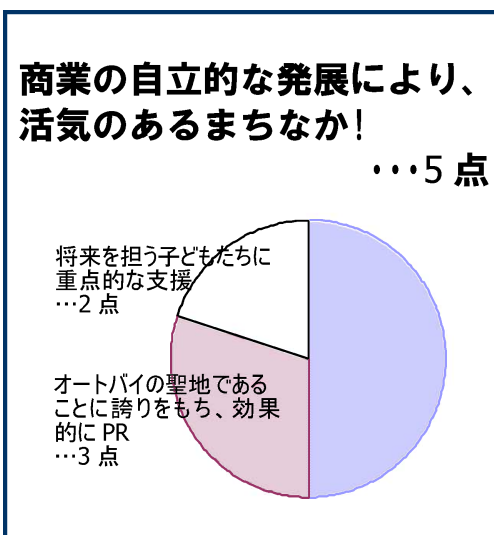
[山下正義さん]
これまでは工業の発展に他の産業が甘えてきた。
これからは商業の自立が必要と語る。

●商業振興に本気度が感じられない

商業振興策には、一体感がない。まちなかの衰退が危惧され、活性化のための取り組みは行われているようだが、駐車場料金は高く、バスは最終の時間が早い。その結果まちなかに夜遅くまで人が留まることができないため、店舗の閉店時間も早い。この状況では、行政と市民が一体となってまちなかを本気で活性化させようとしているのかと疑問を感じてしまう。また、バスは浜松駅から放射状に運行されているため、浜松駅が近づくとも交通量も増え、渋滞してしまう。例えば、遠鉄電車の駅を起点に東西にバスを走らせるようにすれば、交通量も平準化され、人の流れも変化することとなり、商業に新たな可能性が生まれるのではないかと。

●素材を活かす PR ができないのは、もったいない

ものづくり産業が成熟期を迎える中、今後に向けて、商業の自立的な発展が必要である。公共事業も一時的な景気浮揚には有効だが、これからの人口減少社会を考慮すると、30年以上もメンテナンスを行う必要のあるハコモノへの投資は控えるべきである。市の発展のため、行政が注力すべきなのは、将来に負担を残す可能性のある公共投資よりも、観光も含めた本市商業のあるべき方向性を明確に示すことである。世界的なものづくり企業による産業観光のみならず、歴史、風土など、世界中から人を呼び込むことができるコンテンツはそろっているため、効果的な PR さえ行えば、商業の自立的な発展は可能である。



【浜松市への期待度グラフ】

●安くて安全な水道水の供給のために

水ビジネスの海外進出が始まりしばらく経つ。元来独立採算が原則となっている上下水道事業について、将来的には民営化という流れもくるのではないかと。その際、安くて安全な水を供給できている現在のビジネスモデルの維持が何よりも重要である。我々水道工事に携わる者の責任も大きくなる。近年の規制改革の一環で、水道工事業への参入が容易となっているが、安全、確実なサービスのためには、必ずしも歓迎できる状況ばかりではないと感じている。

●夕食支度時、子どもの声が聞こえる

昔のように、夕飯の支度をしながら、子どもの声が聞こえるような、気軽に遊べる場所が、地域に少なくなってきたと感じる。

また、社会全体として、子どもに対する寛容さや社会の許容度がなくなり、子どもにとって窮屈な環境になっている。

かつてのように年令の上下を問わず皆で遊ぶ機会も少なくなっている中、公園の整備などに留まらず、地域社会全体で子どもを見守り、育てるまちとなってほしい。



【山田夏子さん】
玄関口である駅が閑散としているため、近隣の市町村から人の出入りが活発になればと語る。

●人や物が集まる活気ある中心街を！

浜松は、郊外が目覚しく発展した一方で、まちなかは老朽化し、活気を失っていると感じる。

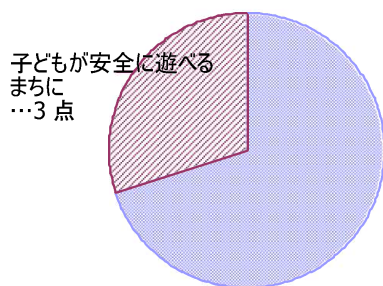
団塊の世代をはじめ、中高齢の方々から、中心市街地には、買い物する場所がなくなったと聞く。これらの世代をターゲットにしたお店が浜松に少ないため、多くは、他の大都市へ買い物に行ってしまう。

また、美術館や市役所など、人を集める機能が分散しており、公共交通機関の移動に便利とは言いがたい。地下道については一部を廃止し、平面交差を整備したものの、市役所前は、依然地下道で、徒歩での移動も不便を感じる。他地域からのお客様にとっても、わかりにくく、不親切な案内となっている。

いろいろな物が集まることで活気は生まれ、需要も発生する。都市機能を、中心市街地に集積し、他地域にお金を流出させない政策を期待している。

今後は、情報産業などを中心に、中心市街地へ誘導する起業支援を行ったらどうか。

中心市街地が活気あふれるまちに…7点



【浜松市への期待度グラフ】

●会計を通じた支援を！

会計というと、非常に難しく捉われがちだが、小遣い帳やPTAの資金管理など、身近なところに会計はあり、社会で重要な分野となっている。

地域の特徴を知る取り組みの一つとして、若い人たちにも、会計をもっと知ってもらいたいと考えている。

また、会計士協会では、学校に訪問して、子どもたちに会計に触れながら社会の仕組みを知ってもらうという活動を行っている。浜松では事例がないため、今後機会があれば、浜松でも行ってみたい。

やまもり たつや
山森 達也さん

浜松クリエイティブ産業機構

●浜松の音楽文化

浜松にはライブハウスや DJ ができるスペースが多い。また、音楽関連の企業が音楽経験者を採用し、個人的な音楽活動を認めていることがアマチュアミュージシャンのスキルの高さにつながっている。

その一方で、プロミュージシャンが少ない。自らが置かれた社会的な逆境から抜け出すためにプロになる人が統計的に多いとされるが、浜松にはそこまでの状況にある人が少ないからだ。浜松出身のプロがいないのであれば、他地域出身のミュージシャンを呼び込むため、活動しやすい場所にする工夫が必要だ。



【山森達也さん】
「みんなのはままつ創造プロジェクト」にクリエイティブ産業機構が提案する事業が 2 年連続で採択。創造産業の振興とその意義に対する理解の普及に取り組んでいる。

●中心市街地はにぎわっている

まちなかを訪れていない人や古き良き時代を知っている人は、「中心市街地は活気がない」というが、まちコンなどのイベントが増えたため、最近のまちなかはにぎわっていると感じる。ただし、賃料が高くて新規出店が少ないという問題はある。もっとユニークな店が出てほしいし、それには行政の支援が必要だ。

●クリエイティブ産業を創出する

かつての浜松では、「やらまいか」の精神で新たな産業が興り、大企業が輩出した。しかし、現状では政令指定都市の中でも起業率が低いのが実態である。昔は「足りてない」ものを満たすための第 1 次産業や第 2 次産業があれば十分であったが、今は「足りている」時代であり、売るためのマーケティングや新たな産業モデルの構築が重要になっている。浜松には、ものづくりに対する誇りや音楽文化に基づく芸術的創造性があり、創造性を資源とした新たなク

リエイティブ産業の創出が可能だ。このような産業の創出は「創造都市」づくりにつながる。最終的には、都市経済内で循環型モデルが構築され、産業面でも文化面でも全て地産地消できる都市となってほしい。

創造都市として世界的に注目される都市・・・4 点

クリエイティブ産業に基づく都市経済モデルの構築
…1 点

付加価値、ブランド性、デザインに対する価値の向上
…2 点

歩いていて楽しいと感じるまち
…3 点

【浜松市への期待度グラフ】

●創造都市の政策を進めるためには

平成 20 年度に策定された文化振興ビジョンの内容は、創造都市の観点からすると素晴らしい内容だ。しかし、文化政策としてのビジョンであり、その他の部署には浸透せず形骸化してしまっていると感じる。創造都市を推進するためには、市役所に横断的な役割を担う部署が必要であり、そこには他部署に異動をしない専門家がいた方がよい。

よしだ かずこ
吉田 和子さん

地域活性化プロジェクト らびりんすゆうとう代表

●ゆうとうが大好き！！

らびりんすゆうとうは、雄踏が大好きな仲間が集り、地域活性化のプロジェクトを実施する市民活動団体。自由な立場を活かして、垣根をつくることなく、学校や地域のサークル、商工会の方々とも繋がり合ってまちを元気にすることを目指している。

外の方を招致するというのももちろん大事だが、何よりも雄踏に住んでいるみんなが元気で楽しくなることを重視している。



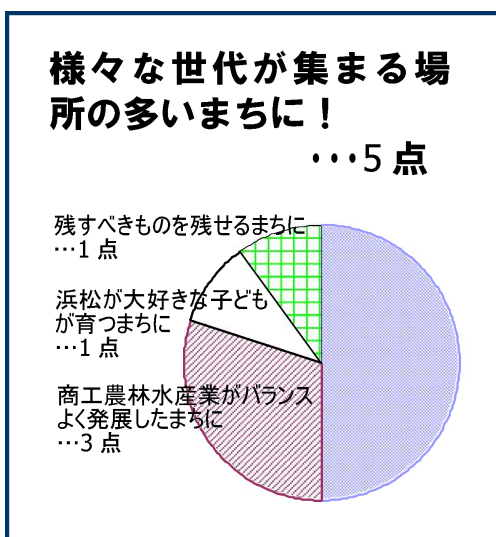
●すココンすココン・・・

雄踏町では、昭和の中ごろまで、子どもたちが「すココン・・・」と唱えながらお赤飯やお菓子をもらい歩いたという、地の神様のお祭りが慣わしとなっていた。このような、忘れかけていた地域のお祭りを再現したいと考え、地域のみんと協力しながら、お年寄りから子どもまで楽しめるイベントとして復活させることができた。

雄踏は、歴史も文化もあるまちなので、その伝統を次の世代に伝承していきたい。イベントを開催すれば、世代間が交流する場が増え、先人の苦勞、浜松や雄踏の歴史を伝えていくことができる。こうした活動を通して、浜松や雄踏が大好きだという子どもが増えてほしい。

●経済格差より世代間格差の解消が大事

世代間格差の存在に不安を感じている。世代間の会話が減少し、相互理解が浅くなっているのではないか。それぞれの世代が抱える問題を理解できないことで、例えば子育て世代や一人暮らしの高齢者に対して、地域住民がどのように手を差し伸べればよいのかわからない。災害時にも適切な対応が取れないのではと心配になる。



【浜松市への期待度グラフ】

雄踏町は、昭和の時代まで商店街として栄えていたが、現在は高齢化・後継者不足でかつての面影がなくなりつつある。一方で、新興住宅が増え、新しい住民が増加している。

地域の中で考え方が異なることもあるが、「楽しい・おもしろい・ゆかい」をテーマに掲げたイベント活動を通して世代間の交流を増やし、少しでもまちが活性化に向かうよう、地域の方々との協力しながら、頑張っていく。

30年後の未来を夢見るなら、厳しい今を我慢することも大事。そして、今ある知恵や有形無形の財産をいかに30年後のために使い、伝えるべきかを真剣に考えたい。

よしだ

吉田 ガブリエラ さゆりさん

Minority Youth Japan 所属



【吉田ガブリエラさゆりさん】
日本とブラジルの架け橋になりたいと笑顔いっ
ぱいで語る。

●市長の発言に感謝

Minority Youth Japan のプロジェクト責任者として活動している。日本とブラジルの間で家族が離れ離れ、日本で育ち日本語しか話せず母国の文化に溶け込めないブラジル人は多い。この中で帰国支援事業を活用した人は日本への再入国が許可されないと制度には強い不満がある。実際に家族が離れ離れなってしまった外国人の事情を理解してほしい。メディアには帰国支援事業を活用した人の背景が分かるような取り上げ方の工夫を望む。

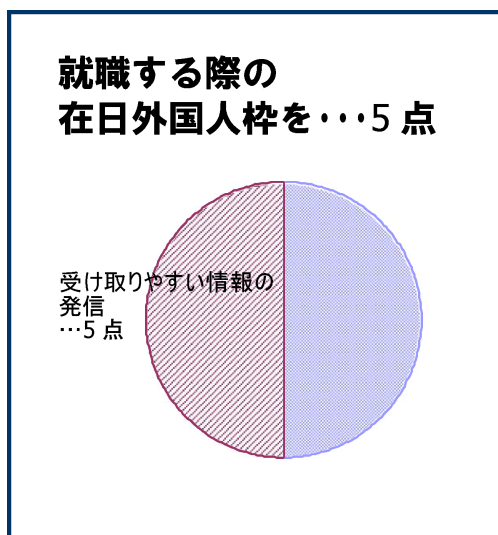
浜松市長が定例記者会見で「国には柔軟な対応を求めたい」と発言してくれたことで、自分たちに目を向けてくれているのだとすごく嬉しく感じ、私たちの活動が後押しされた。浜松市には多文化共生の理想的なモデルになってほしい。

●先生のサポートに助けられた

中学生時代、先生が必死に「学校に来て！」と訴えかけてくれた。この言葉で、自分は学校をドロップアウトせずに済んだ。外国人教育に関しては、少しでもやる気がある人には支援体制が整っている。しかし、勉強が得意でない人も、生きる希望が持てるよう支援が必要と考える。何かしらの見直しが必要だと思う。

●外国人にも情報を受け取りやすく

SBS テレビが自治会の人たちから「ブラジル人は避難訓練に参加をしない」という情報を聞き、参加しない理由を知るために自分を通訳として呼び、中田島団地に住んでいる人たちにインタビューに行った。その人たちからは避難訓練の情報が外国人たちにうまく届いていないと聞いた。外国人あてに自治会から文書が出て、難しい日本語が理解できなかつたり、自分あてでないものは見ずに捨てたりしてしまう。文書に簡単な日本語・多言語を記載すること、また、本人あての名前を記載することで外国人にもっと受け入れられやすくなると思う。



【浜松市への期待度グラフ】

浜松市からの書類についても、もっと多言語に配慮してほしい。国勢調査の書類が届いた際に、自分が家族の分を翻訳した。日本語を話せる人はひらがなで記載されていても問題ない。しかし、日本語を話せない人には漢字・ひらがなに限らず、その人に合った言語での書類を送付してほしい。

よしだ みえこ
吉田 美恵子さん

NPO 法人浜松男女共同参画推進協会副理事長
元はまきた女性懇話会会長

●企業のエッセンスを加えた浜松らしさ

浜松は広域で、自然にも恵まれており、また多文化共生も進んでいると思う。さらに企業と NPO が一体となって地域貢献をすれば、新たな「浜松らしさ」が生まれ、内外に情報発信できるのではないか。企業や様々な団体が地域で活躍できるよう、支援していくことが求められている。

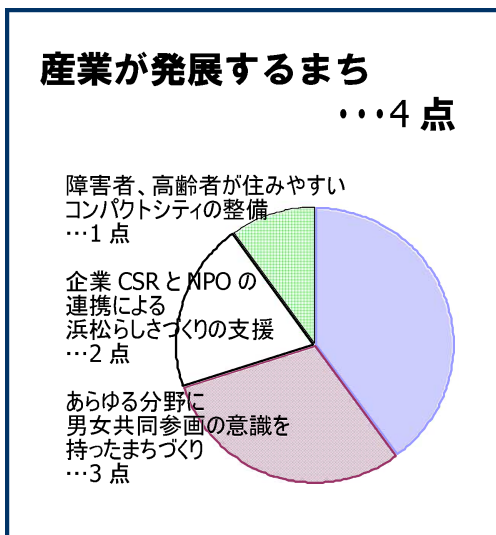
●男女共同参画社会を目指して

平成 5 年からはまきた女性懇話会に参加し、平成 17 年の合併により NPO 法人浜松男女共同参画推進協会に在籍し、男女共同参画社会づくりを目指している。セミナーで、「21 世紀の社会をリードするのは女性である。女性がエンパワーメントし、男女共同参画の視点をあらゆる分野に反映させることが必要」と学んだ。国に男女共同参画基本法ができ、浜松市には男女共同参画推進条例もあるが、残念ながら市民の男女共同参画に対する意識にあまり変化は見られない。これからは、若い世代の意識付けから始める必要がある。

●防災をキーワードにネットワークを

市内で、男女共同参画の推進に取り組む団体は複数あるものの、その団体間の連携が薄れている。北区は活動が活発だが、それはいくつかの団体がまとまっているからだ。男女共同参画社会に向けて推進力を強めるには、団体間のネットワーク化が必要だ。

2 月に、NPO 法人イコールネット仙台代表理事を招き、東日本大震災の体験をテーマとしたセミナーを開催した。避難所生活や被災者支援には女性の視点が欠かせないことを、体験談をもとに改めて知らされたセミナーだったが、団体間のネットワーク化の必要性を認識いただくことも主催者の目的としてあった。喫緊の課題であり、みんなが関心を持っている防災をキーワードにネットワーク化を進めていきたい。



【浜松市への期待度グラフ】

●男女共同参画社会づくり宣言事業所

県が、従業員の子育てや介護など、生活と仕事の調和を推進している会社を「男女共同参画社会づくり宣言事業所」として認定し、企業を PR する事業を行っている。現在市内にも約 120 社の事業所が登録しているが、その後の活動が重要だ。昨年は宣言事業所の取り組みをまとめた冊子を作成し、事例発表など意見交換会を開催したが、今後も登録事業所の増加のための働きかけと、登録後の支援をしていきたい。これからの時代、積極的にワーク・ライフ・バランスの視点を企業経営に取り入れることのできる柔軟な企業が成長していくと考える。

新・総合計画の策定に係る市民インタビュー

発 行 : 浜松市企画調整部企画課
発行年月 : 平成25年9月
住 所 : 〒430-8652 浜松市中区元城町103番地の2
電 話 : 053-457-2241
F A X : 053-457-2248
E - m a i l : kikaku@city.hamamatsu.shizuoka.jp
U R L : <http://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/>